

社会教育に関する調査研究
就学前の家庭教育支援 実践事例集

親の学びを支援する

～学びの広がりと深まりによる質の向上を目指して～



岡山県生涯学習センター
平成30年3月

はじめに

開始から7年が経過したおかやま子ども応援事業では、着実に事業が推進され、多くの皆様が地域における様々な活動の中で、地域や学校に深い理解と関心を持ち、熱意を持って献身的に取り組んでおられることに対しまして、心から感謝を申し上げます。

さて、岡山県では子どもたちの豊かな成長のため、子どもたちの発達の過程での切れ目のない支援を進めていきたいと考えているところです。

第10期岡山県生涯学習審議会は、「新晴れの国おかやま生き生きプラン」や「第2次岡山県教育振興基本計画」で掲げる基本方針や課題を踏まえ、「すべての子どものための家庭教育支援の充実に向けて～教育県岡山の復活を目指して～」をテーマに、今後の進めるべき施策の方向性等を審議し、県教育委員会に対する提言書をまとめました。提言書「すべての子どものための家庭教育支援の充実に向けて」には、「家庭教育支援は、乳幼児期から、子どもの発達に応じて切れ目なく必要な支援を家庭に届けることが重要であり、行政や地域住民、学校、企業、NPO等の多様な主体が相互に連携しながら進めていく必要があります。」と記述されています。

当センターでは、今年度は就学前の家庭教育支援について調査研究を行い、県内の素晴らしい実践を見ることができました。

そこで、事例をまとめ、広く情報発信し、就学前の家庭教育支援を推進する気運を高めることをねらいとした本事例集を作成しました。

本事例集が、子どもや保護者を取り巻く豊かな環境づくりの推進につながれば幸いです。

終わりにになりましたが、取材を快く引き受けてくださった、岡山市立御南西公民館、岡山市立上道公民館、ライフパーク倉敷市民学習センター、NPO法人岡山県自閉症児を育てる会の皆様、本事例集の作成に当たってご協力いただきました関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

岡山大学大学院教育学研究科 熊谷愼之輔教授には本調査研究の検討委員として貴重なご指導をいただきました。心から感謝を申し上げます。

平成30年3月

岡山県生涯学習センター 所長 村木 生久

目次

1	調査研究の視点	1
2	実践事例	
	学びの「広がり」実践事例（1）	
	岡山市立御南西公民館	
	「おとうさんの子育て応援講座 おとうさん、出番ですよ」	4
	①学びの「広がり」	5
	②立ち上げの経緯・講座情報	6
	③活動の様子	7
	学びの「広がり」実践事例（2）	
	ライフパーク倉敷 市民学習センター	
	くらしき市民講座「これから出産を迎える人のためのパパママセミナー」	12
	①学びの「広がり」	13
	②立ち上げの経緯・講座情報	14
	③活動の様子	15
	学びの「深まり」実践事例（3）	
	岡山市立上道公民館「子育て寺子屋」	20
	①学びの「深まり」	21
	②立ち上げの経緯・講座情報	22
	③活動の様子	23
	学びの「深まり」実践事例（4）	
	NPO法人岡山県自閉症児を育てる会	
	「ぐんぐんぴっぴ・赤磐ぐんぐん」	28
	①学びの「深まり」	29
	②立ち上げの経緯・講座情報	30
	③活動の様子	31
	岡山県生涯学習センターでの家庭教育支援における人材育成実践事例	
	平成29年度 社会教育実践専門講座 『家庭教育支援』	37
3	まとめ	41
	岡山大学大学院教育学研究科 熊谷愼之輔教授	43

【切れ目のない支援・就学前の家庭教育支援】

岡山県では、子どもたちの豊かな成長のため、子どもたちの発達の過程での切れ目のない支援を進めていきたいと考えているところである。

第10期岡山県生涯学習審議会は、「新晴れの国おかやま生き生きプラン」や「第2次岡山県教育振興基本計画」で掲げる基本方針や課題を踏まえ、「すべての子どものための家庭教育支援の充実に向けて～教育県岡山の復活を目指して～」をテーマに、今後の進めるべき施策の方向性等を審議し、県教育委員会に対する提言書をまとめた。生涯学習審議会の提言書「すべての子どものための家庭教育支援の充実に向けて」には、

「家庭教育支援は、乳幼児期から、子どもの発達に応じて切れ目なく必要な支援を家庭に届けることが重要であり、行政や地域住民、学校、企業、NPO等の多様な主体が相互に連携しながら進めていく必要があります。」

と記述されている（抜粋）。

また、文部科学省の家庭教育支援の推進方策に関する検討委員会報告書（概要）には次の記述がある。「I 全ての親の学びや育ちを応援するための方策

◇親としての育ちを応援するための親同士の交流の促進について

- ・交流の中で悩みや疑問を共有しながら学び合い仲間として共感することのできる、親同士の交流の場を設定するなどしていくことが有効である。

◇乳幼児期から学齢期につながる切れ目のない支援の推進について

- ・初めて子供を持った保護者や0歳児の保護者への支援から始まり、学齢期での支援へとつながっていく切れ目のない支援が求められる。

◇体験の中で子育てや適切な生活習慣づくりを学ぶことについて

- ・父親が、子育てに当事者意識を持って参画していくことを促すために、保育体験のような育児に自ら携わる、体験する試みが有効である。」（抜粋）

現在、岡山県では、おかやま子ども応援事業を進めているが、就学前の子どもへ必要な家庭教育支援を充実させたいと考えている。現在は就学前の家庭教育支援に取り組んでいないが、必要に応じて講座等を立ち上げたり、今ある取組を充実させていったりする際に参考になるように、就学前の家庭教育支援を実践する上でのポイントを整理し、好事例を紹介することにより県下に広めたいと考えている。なお、就学前の家庭教育支援には訪問型の支援等も考えられるが、今回は焦点を講座や研修会を企画・運営する際のポイントに絞って取り上げる。

【親の学びは重要である】

家庭教育支援の対象が保護者であることは明らかであり、子どものより健やかな成長へつなげるうえで、保護者の学びは重要である。

家庭教育支援を行う場合には意図的に保護者の学びを設定することが必要になる。学びというとかたぐりしく聞こえるようだが、要するに保護者の方々が日々の子育てに生かせるような知識を得たり体験をしたり、気づいたりできる場を主催者がつくることである。例えば、折り紙を親子でいっしょにする場合であれば、ただ単に親が折り方を学ぶだけだと家庭教育支援とは言えないだろうが、折り紙を折る際の子どもへの関わりや接し方を学べるのであれば家庭教育支援としての取組と言える。保護者や子どもが参加する子育て相談サロンのような内容も家庭教育支援に入る。主催者が事前に意図的な内容を用意しなくても、その場で臨機応変に出た質問や相談に答えるという内容なら、そこで聞いたことが日々の子育てに生かせるからである。

親（保護者）として学ぶ機会は重要である。親に学びがあるということは親や周りの環境に変容や一層の充実が期待できるということである。

【学びの「広がり」と「深まり」による質の向上を目指す】

家庭教育支援でも子育て支援でも学びは重要である。まずは学びが位置付いていることが大切であるが、次のステップとして、学びの中身、学びの質の向上が求められる。したがって、主催者が講座の内容を考える際には、単に学びの機会を提供したり、同じような学びを数多く実施したりするだけではなく、学びの質に着目し、講座を企画することが大切である。そこで、本調査研究では、親の学びの質に着目し、支援のあり方について検討する。

その際、学びの質の視点として、「広がり」と「深まり」が大切であると考えた。

「広がり」は対象の幅を多様に設定することで生まれる。それは母親だけでなく、父親の参加や出産前の夫婦の参加であり、祖父母などの参加もあるだろう。父親の参加によって、家庭の中で家庭教育の幅が広がる。出産前の夫婦の参加は子どもが生まれる前に思いを共有することができる。例えば、対象でいうと次のような広がりが考えられる。

- 父親の参加
- 出産前の夫婦の参加
- 祖父母の参加



「深まり」は、保護者の理解や子どもへの思いが深まったり、技能や意欲が向上したりすることであり、学ばせる内容や学ばせ方（学習方法やプロセス等）などを工夫することによって生まれる。したがって、学びを「深める」ためには主催者が意図的に親の学びを設定することが重要であり、必要不可欠であると考え。例えば、学びの「深まり」を促す工夫は次のようなものが考えられる。

- 保護者の様々なニーズに応える内容になっている。
- 親同士の学びがある。
- 継続的な講座を設定している。
- 自分の生活を振り返りつつ学べる。
- 体験する場面を設定している。
- 他の事業との関連を意識して設定している。
- 学んだ者が今度は支援者になる。学びの循環が起こる。
- 参加者自身が学ぶ内容を主催者といっしょに決める。
- 自分や家族の生き方も変容する。
- 実践の中で新たな課題が生まれ、その解決を主体的に図っていくというような新たな展開が生まれる。
- 子どもの特性に合わせた必要な支援を行っている。

【好事例を紹介する】

「広がり」と「深まり」の2つの視点ごとに事例を通して考察していきたい。

今回の事例では、「広がり」の事例と「深まり」の事例に分けて掲載しているが、「広がり」の実践の中には「深まり」の内容がいくつも入っているし、「深まり」の実践の中には「広がり」の要素も入っている。質の向上を考える際の視点として「広がり」と「深まり」に着目しているということをご理解いただきたい。

「広がり」の事例

○岡山市立御南西公民館

「おとうさんの子育て講座 おとうさん、出番ですよ」

○ライフパーク倉敷 市民学習センター

くらしき市民講座「これから出産を迎える人のためのパパママセミナー」

「深まり」の事例

○岡山市立上道公民館

「子育て寺子屋」

○NPO法人岡山県自閉症児を育てる会

「ぐんぐんぴっぴ・赤磐ぐんぐん」

県の取組事例

○岡山県生涯学習センター

「平成29年度社会教育実践専門講座『家庭教育支援』」

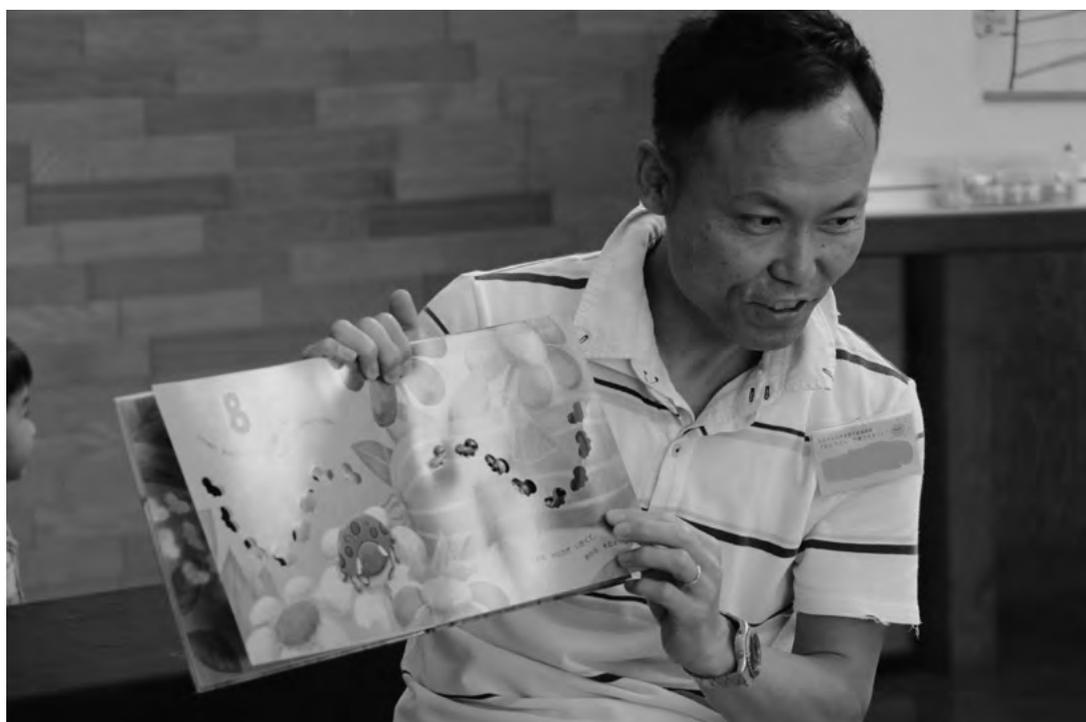


学びの「広がり」実践事例（1）

岡山市立御南西公民館

「おとうさんの子育て応援講座

おとうさん、出番ですよ」



①学びの「広がり」

岡山市立御南西公民館
「おとうさんの子育て応援講座
おとうさん、出番ですよ」

◆父親の参加◆

この実践には、学びの「広がり」がある。それは、父親の参加だ。父親の参加によって、家庭の中で家庭教育の幅が生まれる。

もちろん、この講座は参加の対象が父親という学びの「広がり」だけでなく、親同士の学びがあったり、体験する場面を設定したりするなど、学びの「深まり」に関する内容をいくつもやっているが、ここでは「広がり」に関する観点から記述する。

この講座の一番のポイントは、父親に焦点を当てていることにある。

「絵本の魅力を感じてみよう」の主な内容は、絵本の読み方、絵本を読む際に気を付けること、おすすめの絵本、手遊びなどの遊びの種類、遊び方、子どもとの関わり方等である。

この講座では絵本『だるまさんが』などのように、体を使って、子どもを軽く揺さぶりながら読めるような絵本を入れたり、ダイナミックな手遊びを取り入れたりするなど、父親の特長を活かすことができるような展開を心がけている。

また、父親の読み聞かせや各家庭で読んでいた読み聞かせの本の紹介等の場面が設定されている。父親自身の行動が変容し、あるいは自信を深め、子どもの成長にプラスになる。読み聞かせは子どもたちにとって愛された記憶になる。子どもにとって読み聞かせてくれるのが父親ということになれば、母親とはまた異なるよさを記憶することだろう。

また、絵本以上に父親にとって興味深いことは、アンケートからも分かったことだが、絵本を通して父親同士がそれぞれの親子の関わりの様子を知ることができるということである。これらは大きな学びの内容となる。それぞれの父親の絵本の読み方、子どもとの関わり方、どんな絵本を読んでいるのか……。

父親が公民館の講座に足を運ぶことによって、父親の子育ての意識が強くなることや参加する間の時間は母親の自由な時間が作れることも大きいようだ。

読み聞かせの活動としての連携先はわくわく文庫である。スタッフは藤原春子さん、片山由美子さん。わくわく文庫とは、個人やグループが、公民館や集会所などの地域の施設を利用して、子どもに本の貸出やおはなし会、絵本の読み聞かせなどの活動をしている私設の図書館である地域文庫の一つである。岡山市にはこの地域文庫が20近くある。その一つがわくわく文庫で、御南西公民館で絵本の読み聞かせや工作あそび、わらべうた、手遊びなどを定期的に行っている。

「おとうさんの子育て応援講座」の今年度の連携は他に御南第二保育園、岡山わらべうたの会がある。

この「おとうさんの子育て応援講座 おとうさん、出番ですよ」は年7回の連続講座である。連続講座の中で父親たちが意識を高めていく計画だ。御南西公民館は「おとうさんの子育て応援通信『いいぱぱ』」を発行し、連絡や感想、おすすめの遊び場等を掲載して子育ての支援としている。



②立ち上げの経緯・講座情報

◆0～4歳児が多く、転勤が多い地区◆

平成18年度に岡山市立御南西公民館に勤務していた猪原^{いはら}一道主任（社会教育主事）は3年目の年にこの「おとうさんの子育て応援講座」を始めた。当時、御南西公民館の地域は、転勤の家庭が多く、入れ替わりも激しく、子どもの年齢層は0～4歳児が多かった。

こうしたことから、就学前の家庭教育支援、親同士の交流を主な目的とした「おとうさんの子育て応援講座」を始めた。就学前の家庭教育支援を公民館で行うと、父親・母親どちらかの時間が空いて有効に時間を使うことができることも大きな理由であった。

当時、岡山市の他の公民館でも岡山市男女共同参画推進週間・さんかくウィーク公民館行事で就学前の家庭教育支援は行われていたが、父親を対象にした連続講座はあまりなく、父親を対象とした就学前の家庭教育支援のさきがけであった。

猪原さん自身、その頃、2歳児がおり、父親仲間（いわゆる「パパ友」）がほしかったとのことであり、同じような思いをもっている父親は多いだろうという強い思いからであった。

同時期、猪原さんは公民館職員として岡山大学で行われていた社会教育主事講習に参加していたが、社会教育の考え方や実践的な研修等で様々なことを学べたと言い、自身が勤務する公民館で地域住民にとって必要な講座を作りたいと願っていた。

立ち上げ当初は毎月1回の講座が終わってから内容等を振り返り、今後どのようにしていくか職員で考えを話し合っ進めていった。12月には父親だけでクリスマス会の企画・実施を行った。当日はお母さんも招待してクリスマス会を楽しく行い、お母さんにもとても喜んでもらえたそうだ。

「おとうさんのための子育て応援通信『いいぱぱ』」は当初から発行。父親同士感想を共有したり、記録として残したりできる足跡として、また、母親への情報提供としてもたいへん有効とのことだ。

講座情報（講座名）「おとうさんの子育て応援講座 おとうさん、出番ですよ」

岡山市のさんかくウィーク2017行事として位置付けている。

【内容】身体を使った遊びや絵本の読み聞かせ、わらべうた、おさんぽ遠足（父親手作りのおにぎり）など、親子で楽しくふれあう。父親同士の交流を図る。

【回数】「はじめまして&ホットケーキづくり」「絵本の魅力を感じてみよう！」「身体を動かして、いっぱい楽しもう！」「わらべうたであそぼう」「おさんぽ遠足と外あそび」「おとうさんの交流会 クリスマス会準備」「みんなで楽しむクリスマス会」の年7回

【会場】 岡山市立御南西公民館

【対象】 生後10ヶ月～就学前の子どもとその父親

【定員】 15組



③ 「絵本の魅力を感じてみよう！」の活動の様子（抜粋）



温かい雰囲気をつくる 安心感いっぱいのお会場

わくわく文庫・保育支援のボランティア3名と公民館職員により、御南西公民館の実技室に温かい雰囲気が流れている。安心感がいっぱいのお会場だ。参加者は父親11名、子ども14名。どの親子もにこやかにこの講座を楽しみにして参加していることが伝わってくる。

■お話・手遊び

まずはわくわく文庫の方が季節に合ったこいのぼりの話やいろいろな手遊びをする。この講座をきっかけにいろいろな手遊びを家庭でもしてほしいという願いがある。「わくわく文庫ではいつもこんなふうに遊んでいますよ。参考になるところがあれば家庭での参考にしてください。」「この手遊びは家では子どもさんと向き合ってしてください。」など声をかけながら楽しく遊ぶ。

■ペープサート

保育支援の方がうさぎとかめのペープサート（紙に動物や人物などを描いて切り抜き、棒を付けて、動かして演じる人形劇）を参加者の親子に楽しんでもらう。これは保育支援の方の手作りのペープサートである。子どもも父親も楽しんで鑑賞していた。



■父親による読み聞かせ

参加者である父親が皆さんに読み聞かせをする。読む父親以外の父親はそれを聞きながら読み方を学ぶ時間となる。「この『10ぴきいもむしだいこうしん』は私の思い出の本で、自分の子どもが小さい時に読んだ本です。今日はこの本を読みたいと思います。」父親の皆さん方は興味深そうに聞いていた。



■わくわく文庫ボランティアによる手遊び・読み聞かせ

わくわく文庫ボランティアの方が手遊びと読み聞かせをする。その中で父親たちにも「子どもが泣いたときは、立つといいんですよ。」「子どもだけでなく、お父さんも楽しむことが大切です。」等とアドバイスをする。



■父親たちの絵本紹介

父親たちが家庭で読んでいる絵本や「こんなときに読んでいます」という読むときの様子等を紹介する。アドバイスすることがあれば、わくわく文庫のボランティアがコメントをする。



「私は子どもだけじゃなく、親共々楽しめるかなと思ってしかけ絵本を読むことが多いです。今は動く絵本を読むことが多いです。今日はこの本を持ってきました。『はらぺこあおむし』です。子ども心を刺激するのか、子どもが気に入っていて何回も読んでいます。」



「私は、絵本は寝る前のギシキとして読んでいます。子どもは10か月で、私は身振り手振りで今必死で読んでいます。・・・」(笑)



❖わくわく文庫ボランティアから❖

「読んでやろう、読んでやろうとガチガチするとうまくいかないこともあります。子どもに一生懸命読むようにしようとするのではなく、親の自分自身が好きな本を読んでいると、子どもは何がおもしろいのかのぞき込んでくるものです。なんで喜んでいるのか子どもから来ますよ・・・」



「うちでは、だるまさんシリーズが人気です。リズムが繰り返し出てくるので、体をゆさぶるのも楽しいです。自分から体をゆさぶっています。絵本は毎週公民館で1冊借りています。ねずみさんシリーズも好きです。今日は『くだもの』という本を持ってきました。・・・」



■わくわく文庫ボランティアによる読み聞かせ・遊び『新聞びりびり』

「絵本が好きな子もいるし、今現在は絵本に興味がない子もいます。親子でコミュニケーションの一つとして絵本を使ってもらえるとよいと思います。子どもとのふれあいや遊びの時間につながります。子どもだからこそ本物の絵を見せたいですね。絵本のことで聞きたいことがあったら言ってくださいね。楽しい絵本として、これはおすすめ絵本の一つの『まゆげちゃん』です。読んでみませ・・・。」

「子育てに新聞をどうぞ。読むのではなく、お父さんがこうやってびりびりとやぶいて遊ぶんです。いっしょにすると子どもたちも喜びます。」



■父親の読み聞かせ、親子でいっしょに読む

練習として、希望する一人一人の父親がみんなの前で読んでみる。「しましま、ぐるぐる・・・。」



最後にそれぞれの親子で好きな絵本をいっしょに読む。



<参加者の声>

①きっかけ ②よかったこと ③お母さんは何と言っているか

①きっかけ

- ・10年くらい前。妻が応募。妻のすすめ。
- ・公民館のスタッフの方に言われて。
- ・3年目。続けたい。公民館の案内チラシ。お父さん自ら申込み。
- ・妻が申し込んだ。平日仕事で土日でしっかりかまっていきたい。
- ・おとどし初めて参加。共働き。土日嫁が仕事の日。嫁から。
- ・8年ぐらい前。嫁さんにすすめられて。地域のことを知らなかった。ふだん働いているので。
- ・月1回参加。奥さんから。
- ・2年目。妻。公民館のチラシ。

②よかったこと

- ・みなさんの話が聞ける。新しい情報。
- ・よそのお父さんと子どもとの様子が勉強になる。
- ・すごく楽しい。
- ・公園やイベントに行く効果みたいなものがある。みなさんと情報交換できるのがいい。パパ率がだんだんと増えている。
- ・ふだんは自分とこだけの手探りでやっている。いろんなやり方が参考になる。
- ・いろんなまわりの子のコミュニケーションがとれるのがよい。いいようになっていけるはず。
- ・他の父と子の様子が見られて勉強になる。
- ・他のみなさんとかからめて、勉強になる。
- ・ふれあいができる。他の人の子育てを知ることができる。やるのが当たり前。自分が子どもをみているときに妻がイベントに行ける。
- ・子どもは他の子どもとからだの方がよい。遊び方の引き出しが増えた。
- ・楽しくできている。



③お母さんは何と言っているか

- ・時間があくので助かっている。
- ・もっと家事を手伝って。
- ・行ってきてくださいと。
- ・フリーの時間をつくる。負担(病院)を減らす。
- ・積極的に。私(お母さん)ばかり行っているの。
- ・いろいろやってきて。いつも感想を聞かれる。どんどん行って下さい。
- ・どうだったと聞かれる。子どもとお母さんが離れる練習にもなっている。



父親にとって、参加のきっかけが絵本そのものだけではなく、他の家の父親と子どもとの関わりがどんな様子なのか実際に見てみたいという気持ち大きいということも分かった。ふだん他の父親と交流することが少なく、貴重な交流の場となっている。実際に自分の目で雰囲気を実感することは大きな意義があるということである。参加のきっかけとしては、妻からのすすめが大きく、10名中9名が妻に勧められて参加している。



学びの「広がり」実践事例（2）

ライフパーク倉敷 市民学習センター

くらしき市民講座

「これから出産を迎える人のための
パパママセミナー」



①学びの「広がり」

ライフパーク倉敷 市民学習センター
くらしき市民講座
「これから出産を迎える人のための
パパママセミナー」

◆出産前の夫婦の参加◆

この実践には、学びの「広がり」がある。それは、出産前の夫婦の参加である。

この講座の一番のポイントは、妊娠中に夫婦で思いを共有できる点にある。

出産してからだけでなく、出産前の夫婦を対象にしている。母親だけでなく父親も対象にしていることも大きな特徴である。夫婦そろって同じ体験をすることにより、生まれる前からの心構えを共有することができる。

この講座はもちろん、参加の対象が夫婦という学びの「広がり」だけでなく、親同士の学びがあったり、体験する場面を設定したりなどの学びの「深まり」に関する内容をいくつも行っているが、ここでは「広がり」に関する観点から記述する。

内容の具体は次のとおりである。

- レッツ！二人三脚 赤ちゃんの心を育む夫婦の関係づくり
- 妊娠すると、どんな身体や心の変化が起こるだろう？
- どんなフォローができる？（夫・妻の立場から）
- これからいろんなシチュエーションが始まる こんなときあなたならどうする？
- お互いの思いの伝え方にはコツがあります 私メッセージで伝えよう
- 安産の秘訣ってあるの？ 実はあります
- お産の間の過ごし方とサポート
- 実際にやってみよう 腰のマッサージ法と圧迫法
- やってみよう！ 赤ちゃんの抱っこ・着替え
- 赤ちゃんのいる生活 あなたならこんなときどうしますか？
- 倉敷市の子育て支援サービスを紹介します
- 赤ちゃんからのメッセージ（詩の朗読）
- 妊娠シミュレーター体験



出産前に夫婦で参加することで、ある場面におけるお互いの気持ちのささいなすれ違いや、そのときに自分の気持ちをどのように伝えるか等について体験的な活動を設定し、赤ちゃんの心をはぐくむための今後のよりよい夫婦の関係づくりを目指している。

学び方としては、自分の子育てに生かせるように、自分の生活を振り返りつつ学んだり、体験したりする場面を設定している。

父親の意識をどのように持てばよいかを重視し、妊婦の妊娠期の身体や心の変化、妻はどんなフォローを望んでいるか、出産時に気を付けること、オムツ替え、着替え、妊娠シミュレーターの装着体験等を取り入れている。

②立ち上げの経緯・講座情報

くらしき市民講座「これから出産を迎える人のためのパパママセミナー」は、夫婦そろって参加し、助産師らの講義によって、妊娠中からの出産・子育てについての心構えや知識を習得し、妊婦体験をすることで、父親をフォローする。会場はライフパーク倉敷市民学習センターである。

ライフパーク倉敷市民学習センターと倉敷市保健所は、この講座を平成21年度から行政の連携講座として共催している。もともと、保健所では両親セミナーとしてこれから初めて出産を迎えるママとパパを対象に、平成10年頃からこのような講座を実施していた。保健所で実施していた事業では父親の参加が少なく、共催のメリットが大きかった。メリットは、次のとおりである。

■ライフパーク倉敷市民学習センターとしてのメリット

- ライフパーク倉敷市民学習センターが、子ども・子育て支援と同時に家庭教育支援として位置付け、生涯学習・社会教育の一環としても行った。
- 共催することにより、受講料が免除され、参加しやすくなった。

■保健所としてのメリット

- ライフパーク倉敷市民学習センターは、倉敷市内公民館28館の中央公民館として位置付けられており、ライフパーク倉敷市民学習センター情報誌等を通じて、多くの住民に広く講座をPRできる。
- 保健所では、ハイリスク支援（虐待など支援が特に必要となる人）を優先して行っているのが現状であり、共催することによって多くの健康な妊婦にも関わることができ、フォローの対象が広がり、産後の支援につなげやすい。
- ライフパーク倉敷市民学習センターは保健所が開所していない日曜祝日にも開館しており、日曜日の講座が開催できることで、より多くの住民が講座を受講しやすい。
- ライフパーク倉敷は会場として、参加者が集まりやすく、その後の利用にもつながりやすい。
- 研修の企画・運営・方法や募集の際の抽選方法など、生涯学習の得意なノウハウを生かせる。

講座情報（講座名）くらしき市民講座

「これから出産を迎える人のためのパパママセミナー」

これからパパ・ママになる皆さんを対象に、助産師さんのおはなしを聴いたり、パパに妊婦さんの疑似体験を行ったりする。同じころ出産を迎える方と交流する機会にもなる。妊娠中期(16週)以降の方の受講がおススメ。

【講師】助産師 西尾敏子氏

【日程】6月25日(日) 10:00~12:00 (全1回) (年間8回実施)

【対象】初めての出産を迎えるママとパパ(妊娠中の夫婦)

【定員】30組 受講料/無料

※情報誌を年4回発行して募集をしている。

(参加者はおやこ手帳交付者数4500人中の30組×8回=240組である。)

連携先/ ライフパーク倉敷市民学習センター、倉敷市保健所健康づくり課



この講座は、西尾敏子助産師が担当する倉敷翠松高等学校看護専攻科の「母性看護学」の授業の一環として年間で専攻科30名程度が参加している。学生にとって、実際に妊娠中の夫婦に初めて接する場となり、母性看護学実習に行く前の貴重な体験の場となっている。

③くらしき市民講座「これから出産を迎える人のためのパパママセミナー」の活動の様子(抜粋)



この講座を続けて10年の西尾敏子助産師に講座にあたって、気をつけていることを聞いた。「夫婦が二人でがんばろうと思えるように。どっちもがんばろうと思える、“いいね”という感じで。」

■レッツ！二人三脚 赤ちゃんの心を育む夫婦の関係づくり

会場はライフパーク倉敷。参加者は30組・60名。倉敷市保健所健康づくり課の保健師と経験年数30年の助産師が説明する。倉敷翠松高等学看護専攻科学生と教員も参加している。

助産師さん、楽しく元気で親しみやすい感じで講義。「子育てはネットワークづくりが大切です。子育ての仲間を作りましょう。今日の集まりをきっかけにしてください。」



前半は講義、後半が実技。まずは円形になった各グループで自己紹介。「いろいろお勉強にきました。」夫婦そろって参加していて活気がある。

助産師さん、「お名前は？おすまいは？現在の妊娠週数は？どこの産院ですか？参加された動機は？同じ産院の人はいましたか？同じ地域の方はいましたか？お互い、知り合いになって、いっしょに子育てをやっていけたらいいですね。」

「お互いの意見を聞くことが大事。夫婦二人三脚。お互いの関係づくりをしていきましょう。」

「妊娠20週前後から胎動が感じられるようになります。28週頃、お腹の赤ちゃんの耳が聞こえるようになります。しっかり声をかけてあげてください。」

■妊娠すると、どんな身体と心の変化が起こるだろう

妊娠後期に起こりやすい症状は、息切れ・病気がやすい・便秘・頻尿・足がだるい・こむらえり・骨盤関節がぐずぐずと緩くなり、腰・背が痛くなる。

妊婦は心の変化も感じやすくなる。感情の起伏が激しくなるので、夫は巻き込まれすぎないように、相手を思いながら温かく接しましょう。





■どんなフォローができる？（夫・妻の立場から）

出産するお母さんがどんな支援を望んでいるかについて考える。「しんどいと思ったらそれをすーっと夫に言えているかどうかですね。夫は妻の気持ちを想像できているかどうかがかギになります。」

ある状況を設定し、妻が手伝ってほしいことを1つあげてもらってワークショップ的な場面を設定する。

「夫は『これを手伝ってほしい』と妻が思っていることを1つあげて下さい。妻は夫にどんなフォローをしてほしいでしょうか？どんなフォローを望んでいるでしょうか？」

数組に話を聴いたり、求めるフォローが一致した夫婦は挙手してもらおう。一致していた夫婦は5組であった。そこで、「愛している人の気持ちだからといっても、分からないのが普通。一致した夫婦は、たまたま当たったか、よくふだんから相談していたかのどちらかです。」

夫婦でふだんからよく話し合うことが大切であることを確認した。

■これからいろんなシチュエーションが始まる こんなときあなたならどうする？

夫婦でお互いの気持ちのありがちな違いについて考える。

「例えばこんな時に、夫のあなたならどうしますか？想定はこうです。妊娠後期。体がしんどくて家事もおっくう。でも、外で仕事をする夫の大変さを思い、がんばって食事の支度。でも待てど暮らせど帰らないし、連絡がつかない。『午前様』に顔を赤くして帰宅。さあ、あなたなら何て夫に声をかけますか？」まず、会場の妻の気持ちを聴く。「なんで連絡してくれなかったの？」「早めに連絡して。」「声かけない。」「無視。」「・・・」

「今度はパパ。こんな時にあなたならどうする？景気もよくない中、気候も変動する中、外部の誘いがあり、会社にも要望を言われ、後輩に気を遣い、上役にはしごかれ、家ではほっとしたいのが本音。やっと帰宅し、けだるく玄関に入れば台所の朝の食器がシンクにそのまま。家の中では、妻は赤ちゃんを寝ている。夕食の準備ももちろんない。こんな時に、夫のあなたはどうしますか？」

夫の気持ちを聴く。「できることをする。」「夕飯を買いに行く。」「ほっておく。」「・・・」

助産師「生まれて1か月の赤ちゃんは、すべて両親に依存した生活です。昼も夜もおっぱいです。この世に生まれて1か月の間は新生児期といって体外の生活に慣れるための期間。赤ちゃんは泣くし、お乳飲むのがへたな子もいます。赤ちゃんのそばにいる人がめっちゃ大事な役割になります。お父さんも抱っこしたり、おむつを替えたり、赤ちゃんにとって大切な存在です。」

■お互いの思いの伝え方にはコツがあります

～私メッセージで伝えよう～

どのように思いを伝えればいいのかについて考える。

「これからいろんな出来事が起こると思います。そのときに自分の思いを相手にどう伝えるかで変わってきます。2人は夫婦であっても他人。だから作り上げていく、積み重ねていくことが大切。ローマは1日にしてならずです。」

「あなたメッセージはあなたが主語にくる伝え方。非難されている、批判されていると相手は感じます。

対して、私メッセージは私が主語にくる伝え方。自分の素直な気持ちが伝わりやすいです。つまり、私は心配したよ。連絡してほしかったな。私は、しんどかったけど、ごはんつくっていたんだよ・・・と気持ちが伝わります。」

夫婦2人でよく相談していくことが大切であることを熱心に伝えていた。助産師の話の中で2人でうなづいている夫婦も多い。



■安産の秘訣ってあるの？実はあります

安産の秘訣について知る。

「安産の秘訣ってあるの？実はあります。それは、体重コントロールです。妊娠中の体重増加は7～11kgがベスト。そうなるようにコントロールします。必要のないダイエットは×。せめて7kgは大きくなってほしいです。「まごはやさしい」でバランスよく（豆・ごま・わかめ・野菜・魚・きのこ（しいたけ）・いも）。避けるべきは高カロリー高脂肪食。野菜は葉物から根菜までバランスよく食べます。給食を思い出して。ピオーネなら2つぶ3つぶ。桃は1カット。果物は食べすぎないでね」

「よく体を動かし、しなやかな身体で。ウォーキング、おそうじとか。初めてのお産は12～15時間くらいかかります。中には3日間くらいかかることも。赤ちゃんは産道の中をまわりながらおりてきます。肥満のために産道が狭くなると、産道をおりるのが難しくなり、時間がかかります。肥満を予防するため、甘いものなどを我慢している妊婦さんもいます。妻の横で食事をする時は、少し妻の気持ちに配慮できるといいかもしれませんね」

「お産の過ごし方の基本は息を止めないこと。リラックスして、食べれるときに食べ、飲み、がまんせず排泄。いきみたいときには息を吐きます。出産のときは何を食べてもいいけど、食欲は湧きません。出産は12時間ほどかかるので、のどごしのよいゼリー等がいいですね。腰のマッサージも有効です。手のひら全体で腰をしっかり擦ると、気持ちが良いと感じる妊婦さんがいます。ときにマッサージをしても、「そこじゃない。違う。下手」と産みの苦しみの中、夫に怒りをぶつける妊婦さんもいます。そんな時には、「ココよ」とか具体的に指示をして夫に伝えることが大切です。夫を怒らずに夫にお願いをするとよいです。お産が終わったらそのあかつきにはお互いに“ありがとう”と思えます」

「お産は100%安全なものではありません。だからこそ、妊娠中に自分達ができる準備を整えて、お産を迎えましょう。」

■やってみよう！赤ちゃんの抱っこ・着替え

夫が主となり、赤ちゃんの抱っこやおしめの替え方、着替えのさせ方を体験する。

「赤ちゃんはお父さんの声を聞いています。お父さんはお世話の中で赤ちゃんに話しかけましょう。するとしっかりお父さんを赤ちゃんが認知してくれます。赤ちゃんは2か月頃には笑います。目が合つてママやパパを見て笑いますよ。とてもかわいいです。」参加者のお父さん「そうなんじゃ・・・」とつぶやき、赤ちゃんのだっこの仕方や服の着替えさせ方の練習に意欲的に入るのであった。

助産師「今日練習するのはパパ。ママは入院中にいっぱいやりますから。」

赤ちゃんのだっこのしかたや服の着替えさせ方の練習には、倉敷翠松高等学校看護専攻科学生も協力。

健康づくり課の佐藤さんが赤ちゃんの1日・生活について説明を行った。

夫が赤ちゃんのだっこや着替えのさせ方を体験するのを妻も見守る。助産師や保健師からのアドバイスを受ける。夫は「これでいいですか？」と確認したり質問をしたりしていた。

■この時期にパパにできることがあります ママにできることがあります

「あなたなら、こんなときどうしますか？A子さんは赤ちゃんと一緒に退院してから1か月经ち、3日前に実家から戻ってきたところ。出産前から赤ちゃんは母乳で育てようと思っていました。でも、母乳が足りているのか不安です。ここ数日は夜中の1時の授乳の後ずっと活動しっぱなしで寝ていません。そんな時期の夜中の1時を想像して、赤ちゃんの泣き声を聞いてみましょう。

(泣き声を視聴)

赤ちゃんは泣くもの。泣き方には特徴やピークがあります。生後2週間から2か月がピーク。理由が分からない泣きもあります。痛々しい表情で長く続く時もあります。午後や夕方によく泣きます。」

「空腹、眠い、暑い、オムツが汚れた等、理由が分かる泣きにはそれぞれ対処します。それでも泣く場合には、抱いて歩いたり、散歩やドライブ、抱き寄せてスキンシップなどをします。それでも駄目な場合、お父さんもお母さんも戸惑ってしまいますよね。そんなときは、赤ちゃんと周囲の安全を確認して、一時その場を離れてもいいです。お茶を飲んだり、電話をしたり、少し気持ちを落ち着けましょう」

夫婦みんなうなずいて聴いている。

「絶対にしてほしくないことがあります。それは泣いているとき体をゆさぶること。これだけは絶対にしないでください。乳幼児ゆさぶられ症候群です。脳や血管を傷つけ、後遺症を残したり、亡くなってしまうこともあります。泣かれるとついイライラしたり、親失格かも・・・と自信をなくして、自分を責めたり、動揺することもあります。」

「怒りを感じたり、動揺してもいいです。大切なのはそんなときに、どう自分の気持ちと向き合うかということです。子育ては自分1人でがんばらない。周りに助けを求めることが大事です。気分転換したり、時間を見つけて休養をとりましょう。」

みんなうなずきながら聴いている。



■子育て拠点を知ろう

倉敷市の子育てサービスを紹介します。

- 産後ケア事業（産後1か月以内の人）
- 産じょく期ヘルパー ○こんにちは赤ちゃん事業
- 一時保育 ○病児・病後児保育
- 派遣型一時保育 ○休日保育
- 保健師・助産師による家庭訪問・電話相談
- 赤ちゃん相談ダイヤル
- はじめの一步教室（0～6か月）
- 地域子育て支援拠点 ○「楽しく子育て あのネット！」

■赤ちゃんからのメッセージ

助産師が、鮫島浩二さんの『わたしがあなたを選びました』という詩の朗読を行った。

最後に、「今は子育てがたいへんな時代。子どもが育つ上で大切なことは、子ども自身が「自分は生きていていいんだ」と心から思えることです。そばにいるお父さんお母さん、2人が手を取りあって協力して、自分だけでなく周りの人、おじいさんおばあさん、いろんな人の力をかりて楽しく子育てしてほしいです。私達も応援しています。みんなで一緒に子育てしましょう。」

終わっても、おしめの換え方等復習をする夫婦もいた。



■妊娠シミュレーター体験

妊娠シミュレーターの体験を希望者が行う。シミュレーターは6.8kgある。試着した父親は「重い。」という感想。寝返りを打ったり立ち上がったりのが大変だと分かった様子である。夫婦で大変さについて話していた。

講座終了後、数人の参加者に感想を聞くと、「非常に満足です。父親が育児をやる気になってくれたから。」(妻)という回答を得た。



学びの「深まり」実践事例（3）

岡山^{じょうとう}市立上道公民館
「子育て寺子屋」



◆様々なポイント◆

この実践には、以下のとおり様々な学びの「深まり」ポイントがある。

- 主催者が意図的に設定した親の学びがある。
- 保護者の小さなニーズに応える内容になっている。
- 親同士の学びがある。
- 継続的な講座を設定している。
- 自分の生活を振り返りつつ学べる。
- 他の事業との関連を意識して設定している。
- 自分や家族の生き方が変容する。
- 学んだ人が今度は支援者になる。学びの循環が起こる。
- 参加者自身が学ぶ内容を主催者と一緒に決める。
- 実践の中で新たな課題が生まれ、その解決を主体的に図っていくような新たな展開が生まれる。

学びはワークショップを通して行う。ワークショップの基本的な流れは

①前回の振り返り ②自己紹介 ③ワークショップ ④振り返り である。

後述のアンケートからも分かるように、参加者が自分を振り返り、変容していく様子がよく分かる。自分の行動が変容する。それは家族の変容につながっている。講師のNPO法人子ども達の環境を考えるひこうせん 代表理事 赤迫康代さんによる、親自身の日常の行動を変容させていくすばらしいワークショップである。

平成 29 年度 テーマ

- | | |
|--------------|--|
| 乳幼児編 | ・ 男の子と女の子 育て方ってちがうの？ |
| 就学前後編 | ・ 子育てでイラッとしたら あなたはどうする？
・ 「甘やかす」と「甘えさせる」 どちらがうのかな？
・ 子どもの悩みに 親はどう向き合う？ |
| 思春期編 | ・ 思春期の入り口～子どもの心の揺れを考える～ |

学ぶ内容は参加者の細かなニーズに対応している。毎回振り返りで共有して次の回へ活かしている。年度末の計画を立てる際には、公民館職員や講師とともに、学ぶ内容を参加者が決める。講師と参加者に実際に公民館に来てもらって話す中で、ニーズを把握したり主催者としての考えを整理したりしている。中学校区内であり、身近で、幼稚園や小学校等の行事と重ならないような日程を組むことができる。乳幼児期の講座を行っているが、参加者から思春期の講座も作ってほしいというニーズが出てきて、思春期についての講座も行うようになっていく。現在は乳幼児期・就学前後期・思春期の講座がある。

また、「学んだ人が今度は支援者になる」姿も描いている。学んだことを広げていくために、「おやこクラブの役員になる」「PTA役員になる」「夫婦の会話にする」「企画した講演会に夫と参加する」。さらに、学びを継続していくと、「励まし合える仲間」という意識の芽生え「わが子→周りにいる子も」「自分の生きざまを考えるようになる」。

上道公民館は公民館だよりを全戸配付している（隔月）6100部。参加者の多くは公民館だよりでこの講座について知っていた。

②立ち上げの経緯・講座情報

平成24年度、岡山市の中央公民館に家庭教育支援の講座を岡山市の公民館でも行いたいというNPO法人子ども達の環境を考えるひこうせん赤迫康代さんからの相談があった。当時、上道公民館の吉田郁美主任（社会教育主事）は赤迫さんといろいろな家庭教育支援の会合でよく顔を合わせ、どちらも家庭教育支援を進めたいとの思いを共有していた。特に吉田さんは、おかやま子ども応援事業の大きな枠組みの中で就学前での実践の大切さを感じていた。

同年秋から上道公民館で家庭教育支援の講座をスタート。乳幼児をもつ保護者を対象に、託児付きで実施した。初年度は定員20名を超える申込みで年5回の実施。学習テーマは受講者の意見を反映する。乳幼児編→就学前後編→思春期編と講座を用意した。目的は「子育ての悩みや知恵を分かち合う」「地域で子育ての仲間をつくる」「学んだことを地域に広げる」の3つであった。「語り合い、学び合い」の繰り返し。特に心を配ったのは、どんなニーズがあるか参加者に聞くことだった。お母さん方の気持ちがすぐに反映できることはとてもよかった。吉田さんは、受講者の中のある1人の方の変容を目の当たりにする中でこの講座の意義と実践への自信を深めていった。吉田さんがポイントに挙げていたのは、次の7つ。「講師との信頼関係」「講師と受講者の橋渡し」「次のステップを同時に考えること」「学習者の変化に敏感であること」「社会の動きにアンテナを張る」「想像力を豊かに」「暮らしに目を向ける」であった。

講座情報（講座名）「子育て寺子屋・『甘やかす』と『甘えさせる』どっちがうのかな？」

岡山市立上道公民館

平成29年6月20日（火）10:00～12:00

【講師】NPO法人子ども達の環境を考えるひこうせん 代表理事 赤迫康代氏

【対象】先着15人

【年間】5回

【方法】ワークショップ

これまでの学習テーマ一覧

平成24年度 乳幼児編

- ・子どもの想像力は、いま育つ！
- ・いやいや時期をどうのりこえる？
- ・子ども同士のトラブル避けていませんか？
- ・子育てのイライラとのつきあい方
- ・ありのままの姿をみとめよう

平成25年度 乳幼児編

- ・きょうだいの子育てを考えよう
 - ・パパの気持ち ママの気持ち ふたりの子育て再発見
 - ・「ほめる」と「認める」のちがいは？
 - ・しつけはいつから？どれくらい？
- 【ステップアップ】

平成26年度 乳幼児編

- ・子どもと一緒にママを楽しむ
- ・「きょうだいげんか」にどうかかわる？
- ・幼児期からタブレットは必要なの？
- ・子どもの嘘 どこまで許してどこから注意？
- ・わがやのルール「おこづかい編」

平成27年度 乳幼児編

- ・え！ほんと？子どもの感情は2歳までにできあがる！？
- ・一緒に考えよう！自分の気持ちを表現するのは親も子どもむずかしいよ

就学前後編

- ・見落としていませんか？子どもの気になるストレスサイン
- ・なぜキレル？キレない子どもに育てるために
- ・「買って！買って～」攻撃とのつきあい方
- ・習い事は いつからどれくらい？

平成28年度 乳幼児編

- ・きょうだいの子育て ひとりっこの子育て
- #### 就学前後編
- ・どのようにつきあっていきますか？子どもとメディア
 - ・豊かな心の栄養になるあそびの根っこを考えてみよう
 - ・もうすぐ夏休み！お手伝いで子どもは伸びる
 - ・夏休みが終わって子どもの成長を感じるとき

③ 『『甘やかす』と『甘えさせる』どっちがうのかな?』の活動の様子(抜粋)

■前回のその後の変化を聞く

本日の学びの内容は「子どもに甘えさせると甘やかすの違い」である。具体的な内容は次のとおりである。



にこやかな感じで始まる。会は前回のその後の変化を聞くことから始まる。赤迫さん「寺子屋の前回『イラッとしたらどうする?』その後の変化を聞きたいですね。」参加者「・・・許容範囲を広げたらイライラはまあいいか、イラッとするのが少なくなりました。ゆるやかにすることで変わってきましたね・・・。」赤迫さん「でも1週間続いたんですね。」参加者「『今こうなっている意味を考えて行動する』というのが少しできてきた気がする。気長につきあえるようになってきたかな。」

■自己紹介

テーブルごとに、名前・子どもの名前と年齢・最近のニュース(ミニ・ビッグ)について紹介し合う。お互いに知り合いの方もいるし、今回初めて参加している方もいる。気になっていることや子どもの水泳教室のこと等、笑いも交えて楽しそうである。積極的な参加ができるようなワークショップになっている。赤迫さん「ちょっと近況報告ができたのかな。久しぶりに会った人もいますね。」

■自己肯定感

赤迫さん「甘えと甘やかす。甘えは大切なんです、どこから受け入れてどこまでがまんさせるかなどについて、今日は一緒に考えていきたいです。」

自己肯定感というものがとても大切です。自己肯定感が低いと、いじめにもつながっているかもしれません。【①自分自身に満足している ②自分には長所がある ③うまくいくか分からないことにも意欲的に取り組む ④つまらないやる気が出ないと感じたこと】の国別と日本のデータを見てください。自己肯定感の高さ・低さを表しています。自己肯定感とは、自分の短所も長所も含めて自分の価値として受け入れている状態、「私は私でいいんだ」と感じられることです。子どもの自己肯定感が育まれるために一番大切なことは、人から大切にされる、愛される、受け入れてもらえることです。その次に、能力への自信です。家族や、周囲の大人の人の関わりがとても大切です。また、日本の子どもたちは10歳前後から自己肯定感が下がる傾向があります。なぜかというと思春期になると、成長の証として周囲がよく見渡せるようになり、そのため自分と他人を比較する傾向がでてくるのです。ですからそれまでの間に、できるだけ子どものいいところを伝えたり、「大好き」を伝え、心の基礎体力をきたえておきましょう。」

■子どもの心は甘えと反抗の繰り返し - 充分甘えを受け止めてもらえた子が自立する -

まず、精神科医の明橋大二さんの説明。次に自己肯定感のイメージや大人にできることについて説明。大人にできること・・・【甘えを満たしてあげる・スキンシップや行動、言葉で愛情を伝える・子どもの良いところにアンテナを立てる・よい面も、悪い面も受け入れてあげる(完璧な人間なんていないのです)・反抗期を「自己主張期」と考える】。赤迫さん「甘えを満たすこと。普段、なかなかむずかしいですね。」子どもの心は甘えと反抗の繰り返し。甘えているときは素直だから「従順」ともいえますが、反抗は親としてとまどってしまうことが多いと思います。(略)十分に甘えを満たしてもらえることで安心感をもらい自己肯定感の育ちにつながっていきます。では実際の場面に置き換えて、甘えの受け止め方を考えたいと思います。」

■どこまでならいいのか。自分の考えを書く

「こんな場合はOK」「迷う場面」「絶対だめな場面」について、自分の考えを書く時間をとる。自分の考えを整理する時間になっている。

各自1つ書けたら、グループで情報交換。自分の意見を言ったり他の人の意見を聞いたりする。

「昨日のことなんですが、子どもが習い事を辞めたいと。休む？と言ったらすごく笑顔になった。でも、それが何も無いときに遊びたいとかになっていくとなったら困るよなと……。それでよかったのかと今でも思う。」「結構いろんな人に相談したら、3才で、すごいいやだと言っていることをさせるのはよくないと聞いたことがある。」「今辞めたらいろんなことを辞めることになるというのは小学校のとき。今はいいのではないのだろうか。」

赤迫さん「ひと通り伝え合うことができましたね。もう少し考えていくヒントとして資料を紹介します。」(資料：「みんな輝ける子に」明橋大二)

■「甘やかす」と「甘えさせる」 どちらがうのか考える

赤迫さん「『甘やかす』と『甘えさせる』。どちらがうのか。これは大切な質問です。これを区別するのが子育てのキーポイントになるのではないのでしょうか。甘やかすと甘えさせるの違いは为什么呢。甘やかすは、大人の都合で支配すること。子どもができることを大人がやってしまうこと。物やお金で心を満たすこと。甘えさせるは、子どものペースを大切にしながら、どうしてもできないことを手助けすること。情緒的な欲求に応えることなど。子どもの情緒的な欲求の代わりにお金で解決していると、子どもはさびしさを物で埋めてしまうようになってしまう。甘やかすと甘えさせるどっちなのか。区別はつきにくいことも多いが、立ち止まって考えることこそが大切なことである。」参加者はうなずいている。

「自立のもととは甘え、安心である。甘えていいときに充分甘えを受け止めてもらい、安心感をもらうと自立に向かう。そのように大事にもらえるのは、自分にそれだけの価値があるからなんだと、自己肯定感を育むことになる。時には突き放すこともあるかもしれないが、それが積み重なると人に頼ることができない人になり、孤立してしまうこともある。人に助けをもとめることができない。大人になって人に助けしてもらわない傾向がある場合、子どものときのそんな経験がもとになっていることも考えられる。」

■どう対応するか自分の考えを書く

書いたことの中でどれか1つにしぼって、グループで考えを出し合う。グループで自分の考えを出したり他の人の考えを聞いたりする時間をとる。気持ちは受けとめる。グループの中でうなずきながら考えを聞いて参加者の考えが深まるようにする。参加者の考えを尊重する。

「幼稚園の準備をどの程度させるか。朝、何がしたい？と聞いて、できることだけする。できなくても「帰ってからしようね。」と言って、できたらほめる。」

赤迫さん「朝はそこまで元気出てない。放課後練習することにして、朝は手伝ってあげる。」「習い事行きたくない。」「おなかすっきりよくなった。」「今日はちがうことがしたかった。ふだんは応援したり励ましたりする。」「ごはんの時間なのにおかし。」

赤迫さん「そのときのその子の状態もみてなんですかね。『おなかすいたよねー。』と気持ちは受けとめると、『分かってくれた』と子どもも思える。『自分の着替え手伝って。』と言われたら、くつ下だけでも少しだけ手助けして、後は自分で。お母さんが気にかけてくれる。『手伝って』と言ってもいいんだな』と思えて自分で向かえる。自分でできることはさせるし、自分でできないことは手伝ってもらえると思える。」

■私のいいところ 子どものいいところ

私（自分）のいいところ、子どものいいところについて、自分の考えを書いて、互いに紹介する。
「私のいいところ・・・。」「子どものいいところ。植物が好き。小学校2年。スープを作ってカレーを作ってきた。好奇心が旺盛。」「私のいいところ。好奇心旺盛でやる気もある。」「子どものいいところ。マイペース。プラス指向である。これでいいんだという自己肯定感が高い。好きなことに熱中する。危機感をもってほしい。これでOKというように。」「私のいいところ。子どものいいところ。人に喜ばれるように。」「幼稚園。男の子と女の子でも違ってくる。熱中しやすい。面倒見がいい。」

赤迫さん「自分のいいところは、少し書きにくいかもしれませんが、見つけることは大切です。お子さんのいいところにアンテナを立てる。日頃これを子どもに言葉にして伝えていきますか？思っているけど伝え忘れていませんか？当たり前と思ってしまっただけで言えないこと。タイミングを逃して言えないこと、伝えられてないことは多い。10才までに自分のいいところを知っておくことは大切。お母さんも自分自身のいいところも立ち止まって考えることが大切です。では、今度は短所にも目を向けてみようと思います。ペアになって話してみましよう。みんなに伝えてもいいような内容で書いてもらっていいですか。」

Aさん「私は、（ ）なところがあまり好きではないです。」

Bさん「私は、Aさんの（ ）なところが好きです。なぜなら（ ）なことは（ ）と思うからです。私はAさんのそういうところが好きなのです。」

Aさん「Bさん、ありがとう。」

自分の考えをワークシートに書く。書いたら1枚右にずらして他の人の書いたシートに自分の考えを書いていく。書いたら情報交換。「私はマイペースなところがあまり好きではないです。」「私は、Aさんのマイペースなところが好きです。なぜなら、自分をしっかりもっていると思うからです。」うなずいている。自分の考えでなく、自分と異なる意見が聞けたとき「おお～っ」という声も出た。「ああすごうれしい」赤迫さん「聞いているとじーんとしますね。短所も裏を返せば、そんなふうと考えられるんだと思うと救われる。自分では好きではないところがこういうふうに言ってもらえると認められた感じがする。いいところを褒められた時とは、またちがったうれしさが出てきますね。」



■リフレーミング（物の見方を変えること、今までとは違う視点から見ること）

赤迫さん「ちょっと見方を考えると気持ちが変わってくる。子どもは身近な人の言葉どおりに自分のことを自己イメージ像としてとらえてしまう。子どもとの関係の中でリフレーミングを取り入れてみると、親のころにもゆとりが出てきたりすることもある。友達同士では自然とできていることもある。親子という近い関係ではできないこともありがちである。」「よい面も悪い面も受け入れてあげる。完璧な人間なんていないのです。甘えさせるー自己肯定感を育てる。日々子どもたちにすてきなおくりものができるのではないかと考え、今日はワークショップをさせていただきました。」

参加者「10才までにたっぷり心の栄養を。甘やかしてではなく甘えさせをしたい。いつからでも土台づくりはできる。子どもの自己肯定感を育てる大切な時期なんだと知れた。子どもにマイナス発言。改めてほしいところばかり言っていて、こっち側の言葉を遣おうと思いました。自分の行動を変えようと思いました。」「ふだんちゃんとできていること気づいていない。そんなところを言っていきたい。」「子どものいいところも悪いところも認めてあげて実際に声に出し伝えていきたいと思いました。」

<アンケート質問内容>

- ①きょう印象に残ったことはなんですか。
- ②これからやってみようと思ったことはありますか。
- ③その他感じたことを自由にお書きください。
- ④この講座に参加したきっかけ。
- ⑤この講座を受けてよかったこと。



<参加者の声>

- ①甘え自立を繰り返しながら成長してきているんだなと思いました。
- ②子どもを1人の人格として、良いところも悪いところも含め「あなたが大好きですよ」と伝えるよう精一杯向き合って育児をしようと思いました。
- ③寺子屋に参加させていただくと、とても育児が楽しくなります。次の日のやる気につながります。月に1回ペースで参加できたらと思っています。
- ④初めは引っ越してきたばかりで、お友達が欲しくて軽い気持ちで参加しましたが、3年目になります。子育ての手助けをしてくれるこちらの受講がとても気に入っているので、今は参加しています。
- ⑤子育てに対する答えを教えてくれるのではなく、自分の体験談を振り返ってみて気づかせてくれるきっかけになっている様に思います。また同じ悩みを持つママさんの貴重な意見が聞けること、私1人だけが悩んでいないんだということが自信につながります。



- ①子どもの良いところをちゃんと声に出してほめることです。
- ②子どもが自分でできることはできるだけまかせて、「できた！」という自信をもたせることです。少しずつできることを増やしていきます。
- ③学校などではがんばっているけど、家ではしっかり甘えさせてあげたいです。しっかりと愛情を与えてあげたいです。お互いに認め合っていきたいです。
- ④子育てしていて、いきづまってしまったり自分の時間がなかったりして子育てに関する講座を受けてみたいと思ったからです。
- ⑤ふだんは気にしていないことを改めて考えさせられます。自分や子ども、家族について見つめ直すことができます。自分の気持ち、意識が変わるだけで家全体の雰囲気が変わるということが分かりました。
自分が子どもだったころのことを思い返すことができ、あの頃の親の気持ちが分かったし、貴重な経験ができました。子育ての仕方でも子どもは変わります。自分が親になって子育てできている喜びを再度実感できています。



- ①・自尊心が低い子どもなので、しっかりと甘えさせてやるのが大切。
 - ・突き放すだけではなく、できないことは手助けをしてやる。
 - ・短所も見方を変えて長所に。リフレーミングしてみる。
- ②・今まで以上に声掛けとスキンシップをして甘えさせる。
 - ・見方を変えてリフレーミングするとイライラも少なくなりそう
- ③自分の長所があまり出ないということは自己肯定感が低いのかなと思います、帰ったら子どもに私のよいところを聞いてみようと思います。ありがとうございました。
- ④数年前にママ友に誘ってもらい初めて参加し、とても勉強になったので、都合がつく時には参加させてもらっています。
- ⑤いろいろと勉強になり、自分の悩みを聞いてもらいスッキリとして帰ることができます。

- ①子どもの年齢が高くなっても大事なテーマだと思いました。気持ちを受けとめ、ゆっくり関わっていきたくと思いました。
- ②話をしっかり聞いて、子どもの行動をリフレーミングする。
- ③久しぶりの寺子屋で癒やされました。情緒的な要求を受けとめてもらえて甘えさせていただきました♡
- ④公民館だよりで知っていたが、友達に声をかけてもらって行ってみようと思った。友達と一緒にだったから申込みができたのかもしれない。
- ⑤その場で解決する悩みもあったが、受講を重ねていくうちに子育てなんだけれど、自分の生き方や考え方に自信を持てるようになったこと。子どもとの関係だけでなく、ママ友や地域の方との関係づくりも講座を通して変化していったこと。



- ①甘えさせる、甘やかすの違いです。依存と自立を繰り返し成長することです。大人の対応で自己肯定感が違ってくることです。
- ②ピンクの資料の大人にできることです。5つの項目を気をつけて実践していきたいです。
- ③先生のお話や皆さんの意見が大変参考になり有意義な時間でした。
- ④公民館だよりを見て参加したいと思いました。子育てに悩んでいたのです。
- ⑤一つ一つ勉強になる先生のお話です。客観的に見ることで反省と今後をつなげることです。他の方の意見が聞けることです。

- ①認められてうれしいです（公民館の方からのコメントや反応もうれしかったです😊）。
- ②プラスのことばをかけて愛情ある子育てをしたいです。熱心なあまり叱りつける場面があるが、笑顔で日々楽しいと思う子に育ててほしいので、私がやり方を変えます。
- ③いつも子育て寺子屋の後は子育てに前向きになります。その気持ちを持ち続けられるよう努めます。
- ④公民館だよりです。
- ⑤日々の子育てについて考えることができました。



学びの「深まり」実践事例（４）

NPO法人岡山県自閉症児を育てる会
「ぐんぐんぴっぴ・赤磐ぐんぐん」



◆特性に合わせた支援◆

この実践のポイントは、1才～5才という就学前の早い段階から発達障害の特性に合わせた必要な支援を行っていることである。自閉症の診断を受けた幼児と、保護者にとって貴重な療育の場となっている。

自閉症に限ったことではないが、特にこの障害においては早期に発見し、早期・超早期に療育を始めることは効果がある。

自閉症かどうかは現在では、1才半検診のアセスメントで分かる。早期の段階で「しばらく様子をみましょう」などと放置しないことが大切である。この段階ではお母さんにとっても一人ではどうしていいかわからず、子育てに不安をもち、精神的にもしんどくなる。

療育はできれば早い方がいい。早く分かればそれだけ早く支援が始められる。早期発見から早期療育へつなぐために事業所を開設した。明るい希望を持ってもらえるように、エビデンスをもとにした指導方針と、その子に合わせた個別指導計画が必要で、ただただどうしようどうしようと言っても始まらない。岡山県自閉症児を育てる会では、お母さんと一緒に子どもたちが「自分らしく」誇りを持って成長していくことを学びの目標にしている。

◆ぐんぐんぴっぴと赤磐ぐんぐん◆

現在、岡山県自閉症児を育てる会では、1才～年少（1・2・3才）を対象にした「ぐんぐんぴっぴ」（以下「ぴっぴ」と記す）と年中～年長（4・5才）を対象にした「赤磐ぐんぐん」（以下「ぐんぐん」と記す）を開設している。

ぴっぴの療育では、まずは良好な親子関係を育むことを目指し、人との関わりに重点を置き、楽しい遊びを通して、人とやりとりする力を伸ばし、「コミュニケーションする力を育てること」「感情の共有」をポイントにしている。

ぐんぐんの療育では、築かれた良好な親子関係のもとで、身の回りのことで自分でできることは自分ですること、小グループの中で適切に人と関わることなど小学校への準備等、自立を目指しての活動をポイントにしている。

◆重視している研修◆

療育において、熱意は絶対に必要なものだが、熱意だけでは適切な支援はできない。利用児たちの今の状態を正確に把握し、家族と共通認識を持ちながら個別の目標に向け、着実に指導することを目指している。そのためには、何よりスタッフ（支援者）自身の知識や技術を高めるための研修を大切にしている。よりよい実践を目指して、研修のため他県や海外まで研修に行く。研修を受けた支援者は日々の療育の中で実践するとともに、伝達講習により技術を共有し学び合っている。一人が学ぶことで、事業所全体の療育の質が向上する波及効果を期待している。

◆深まる支援◆

学びを深めるためにはいくつかの支援を準備している。心がけていることは、有効な支援を行うためにはその効果が検証された技術を学び、実践していくことである。スタッフには学び甲斐がある体制ができており、代表はスタッフにどんなことを学びたいか希望を聞く。また、支援者の実践がきっかけとして、お母さんが自ら家庭を工夫できるようにしていきたいと考えている。「スタッフの言うことだけを聞くお母さんにしてはいけない。」との代表の言葉。スタッフはお母さんと子どもとの関係をスタッフの関係とともにつくる。療育場面におけるスタッフの実際の関わりをお母さんがその場で見えるようにしているので、自分の家での子育てに取り入れやすい。

②立ち上げの経緯・講座情報

平成12年度に岡山県自閉症児を育てる会が従来の親の会から社会的貢献も行うNPO法人になった。

それを機に、あるお母さんから自閉症のための療育の場がありませんかという相談があった。夏休みにお母さんと子どもが2人きりになる。どう過ごすか。そして、どこにいけばいいか。お母さんから療育の場がないと相談を受けたが、当時療育の場として薦める場が岡山にはなかった。

そのため、自ら平成17年度に自閉症児を早期に療育する「赤磐ぐんぐん」をつくった。そこには就学前の子どもから小学生まで、それまで行き場のなかった自閉症のある子どもたちが集まった。続いて、平成25年度に1才半からの超早期の療育の場としてぐんぐんぴっぴが赤磐ぐんぐんから独立した。また、小学校1年生からの療育の場は制度が変わったため、平成24年に放課後等デイサービスとして「ぐんぐんキッズ」に分離した。ちなみにNPO法人岡山県自閉症児を育てる会のキャッチフレーズは「ないものは創っていこう」である。

平成28年4月には社会人となった自閉症者の地域での自立を目指して、グループホーム「ほっぷ1」を建設した。グループホーム「ほっぷ1」は自閉症に必要な支援を受けながら共同生活し、それぞれが自立する力を伸ばす場である。入居者の中には、A型事業所、B型事業所、生活介護、それに配慮ある企業に一般就労をしている人もいる。ここに成人した後の目指す生活スタイルの一つが実現できている。知的能力には差があったとしても大人になったときのそれぞれの安定した暮らしの姿を想定し、それを目指して就学前の早期に支援がスタートできるということは、それだけ将来の生活に活かすことができるということであり、早期療育の意義がより明確に大きくなるというわけである。

鳥羽美千子代表は「いい子に育つんです。ていねいに育てていけば。」と語る。グループホーム「ほっぷ1」のように安心して暮らせるモデルがあることは、就学前の療育を受ける親子にとっても大きな希望がある。

療育の情報

ぐんぐんぴっぴ（1才～年少、1・2・3才）

○時間：療育は週に1回。平日9：00～15：00の間に提供。

定員1日10人。

（年度当初で空きが十分ある場合は週に2～3回）

○形態：保護者と子どもが一緒に過ごす保護者同室



赤磐ぐんぐん（年中～年長、4・5才）

○時間：療育は週に1回。平日9：00～15：00の間に提供。

定員1日10人。

○形態：母子分離療育。保護者は別室のモニターで子どもの様子をみることができる。

※ぴっぴ・ぐんぐんともに、療育の他、勉強会や座談会、講演などいくつもの学びの機会がある。

※平成30年1月末の状況です。

ホームページ（<http://ww3.tiki.ne.jp/~teppey/sodaterukai.htm>）を参照してください。

③ 「ぐんぐんぴっぴ・赤磐ぐんぐん」の活動の様子

◆特性理解と親の目標◆

■自閉症の特性を理解する



自閉症は脳機能に生まれつき問題のある発達障害です。決して親の育て方や接し方で後からなるものではありません。自閉症は、定型発達の子と同じような育て方ではうまくいかないことが多く、しかも、一人一人その特性の表れ方は異なります。自閉症という特性から、見通しがつかないと不安になることが多いです。本人に分かるような方法でスケジュールなどを伝え、まずは安心させます。ですから、私たち周りの支援者が環境を整える必要があります。適切な支援によって、できることを伸ばし、苦手なことを手助けします。自閉症の子どもたちには特性に応じた教え方があります。自閉症の人は最初に覚えたことをそのとおりにしようとするため、初めから正しい習慣を身に付けるよう指導しています。家庭でもお母さんやお父さんの成功体験を増やせるようにしたいと考えています。また、自閉症の子どもには一貫した療育の指導も大切になります。この会はずでに大人に成長した会長のお子さんもいるため、その様子を見て、早期の適切な療育がとて重要なるものであると感じています。

■親の目標をもつ



子育ての目標は、療育の中で見つけることもあるし、勉強会や講演会等で学ぶこともあります。ぴっぴは母子同室の療育であり、週1回の療育が基本となります。ぴっぴには保護者勉強会等もあります。ぴっぴはまだ診断がついて間もない親にとって不安なときでもあります。ですからお母さんやお父さんへのメンタルフォローも大切にしています。週1回の療育では限りがあるため、子どもと家庭で関わるヒントを得てもらっています。

ぐんぐんは母子分離の療育ですが、モニター室を設置しているので、子どもの様子を見ながら家庭でどのように接したらいいか学ぶことができます。赤磐ぐんぐん向けの保護者勉強会等もあります。

ぴっぴに来られる方たちの中には、まだ幼稚園に通う年齢に達していなくて、日中はお子さんとお母さんとが二人きりで過ごしておられることも多いです。だから、最初は週に2～3回来ていただいて生活リズムを整えてもらったり、お子さんにとっては楽しい遊びの場として過ごしていただく方もいます。また、親御さんにとっては他人の目を気にせずホッとできる場として活用していただきながら、療育を受けてくださればと考えています。療育中はお子さんの何気ない行動や、気になる行動をお母さんと一緒に見て、おうちでも似たようなことがないか、その行動の前後はどんな状況かなどを聞かせてもらい、その行動の理由をお母さんといっしょに考えていきます。そして、お子さんの特性についてお伝えしたり、対応策についていっしょに計画をたてたりしています。そうやって、お子さんは関わり方や環境で少しずつ変わっていくということを感じられたお母さんの中に、「もっと家でできることはないでしょうか」と積極的に聞いてくださるようになる方がたくさんおられます。「この本を読んでみたけど、家でどうやって取り組めばいいと思いますか?」「好きなもののためならやる気がわく、と言われたので、車のカードを作って誘ってみたらトイレも歯磨きもできたんです」と家での取り組みを教えてください、やってみたことなどの相談をしてくださるお母さんたちに、感動することもあります。ぴっぴのスタッフはお母さんのお話を聞かせていただき、アイデアをお伝えし、次の療育まで家庭で取り組んでいただきます。そして、どうだったかを聞かせていただくと、「あのやり方はうちの子には合わなかったから違うのを考えたい」「アドバイスをアレンジしたらうまくいった」など、お母さんが取り組まれたことが伝わってきます。すぐにうまくいかないことがあっても、また「いっしょに考える」「やってみる」のサイクルを繰り返すうちに、お母さんもスタッフもお子さんの状態をもっとよく把握できるようになり、お母さんたちもアイデアマンになっていきます。そうしてお子さんを見

つめ工夫を楽しみながら、お子さんとの日々の暮らしを楽しめるようになっていきます。そして当然のことながら、お子さんの気持ちも安定し、できることも増えていきます。これからもどんどんお母さんたちがお子さんをおかわいく思えて、工夫が楽しい、そんな風になれるような支援をしていきたいとスタッフは願っています。

まだ小さいお子さんを持たれているお母さんには年少さんになるまでのこの時期にどんなことをしておいた方がいいかを伝えます。この時期の親の目標として「だいすきで信じられる親になる」ことだと考え、そのために具体的にどうしたらいいかを話します。そのためには感情のコントロールや自分を大切にすることなど、親御さん自身のメンタルヘルスについても説明します。診断を受けて間もなく、わが子のこれからについて悩みがちなこの時期こそ、親子関係をしっかり築こうとすることが親子にとって大切な時期です。1・2・3～4才、本来であればかわいさ真っ盛りの頃です。少しでも保護者の方たちの心配を減らし、希望を持ってお子さんと楽しい時間を過ごしてもらえたらと願っています。勉強会の翌日から、参加されたお母さんたちが「感情コントロールの大切さがわかりました」「子どもへの言葉かけを変えたら分かってくれた」とかおっしゃっていただき、勉強会の手応えが伝わってきます。気持ちをおだやかにして家庭生活が送れたら、お子さんたちはきっと幸せを感じながらぐんぐん伸びると思います。

お母さんも一人でさみしいと不安ばかりにかられることになります。保護者勉強会でも、子どもを可愛く思え、しかも工夫でいっぱい研修を通じて、自分の子にあったものを見つけられるように、家でのヒントも持って帰ってもらいます。

勉強会や座談会でも、自閉症という特性に合わせた、多様で効果的な親の学びを設定しています。



■ CARE (ケア)

CAREは子どもと大人の絆を深めて、関係をよりよいものにしようという目的のもとに開発された心理教育プログラムです。子どもとの関係を築く際に大切なコミュニケーションについてロールプレイを用いながら体験的に学んでいきます。「使いたいスキル」や「減らしたいスキル」等の子どもと温かい関係を築くために子どものリードについていく際に大切なスキルや関わり方について知ることができます。また、子どもが言うことを聞けるように効果的で適切な指示を出すためのスキルや関わり方について知ることができます。主にワークショップの形式で保護者勉強会を行っています。



■ モニタールーム

このモニタールームは「療育に活かすために子どもの活動の様子を”透明人間”になって見たかった」という代表の願いを実現したものです。これは代表が北海道での研修で学んだものを参考につくりました。子どもへの働きかけの様子をモニターで見ながらお母さん同士で話せます。スタッフもいっしょに見ながら課題を指摘することができます。



■ 保護者勉強会・座談会

ぴっぴの勉強会では、例えば、自閉症スペクトラム障害の特性や、ぴっぴの療育で何を大切にしているか等保護者の方同士で悩みを共有し合ったり、仲間づくりの場になればと「保護者座談会」も合わせて行っています。先日の座談会では「公共の場での過ごし方で工夫していること」をテーマに各家庭の工夫を紹介していただきました。

ぐんぐんの勉強会では、例えば、「お子さんを育てる上で大切なこと&1年生になるまでに何を教えていけばよいのかをイメージしてみよう」などと題して話します。ぐんぐんは年中・年長児対象の療育を行っているので、お母さんたちは小学校入学に向けて心配したり焦ったりする気持ちでいっぱいになってしまうことがあります。お母さんたちが焦らずに、大切なことに一つずつ取り組んでいけるよう、目の前の不安を整理するお手伝いをしたいと思ってテーマを選びます。



前回の勉強会では、「わが子をよく知ること」「身の回りのことで、自分でできることは自分ですること」「良好な親子関係を築くこと」の三本柱にして話しました。保護者と療育スタッフが同じことを大切に思い、同じ方向を向いて一緒に考えていけるよう心がけています。ぐんぐんの療育場面で何かができたなら、ぐんぐんだけでなく、ご家庭や園生活でも同じことができるようになって、初めて本当にできるようになったといえると考えています。療育をうまく活用して、家庭での暮らしにそのアイデアを活かしてこそお子さんが、本当に伸びたと感じます。

赤磐ぐんぐんで、子どもたちができることが増えていく要因には、お子さん自身の成長に加えて、親御さんが療育で行っている方法を家でも実践していくこともあると思います。家庭や園でどのように生活に取り入れて取り組んでいったらよいかを相談してくださる親御さんも多くおられます。「スケジュールは家で使うためにはどんなものがあるだろうか?」とか「朝の準備をする時の手順書はどのようなものがあるだろうか?」とその子に合った支援をいっしょに工夫しています。

■支援ツール教室（手順書・スケジュール・PECS）



毎回、会の冒頭に先輩のお母さんから、支援ツールを作って使っている日々のお話をいただいています。子どもに合わせて支援ツールを作っていくポイントや、「小さい頃は身辺自立の支援」「大きくなってきたら社会的な支援・自立していくための支援も必要」というお話や実際に地域で散髪屋に行く時に持って行く支援ツールの実物など、まだお子さんが小さい保護者にも「なるほど!」と感じられるお話も多いです。「支援ツール勉強会は、講師の先生に励ましていただけたり、他のお母さん方の頑張りを身近で見たりすることで、来るだけでもすごく刺激になって頑張れます」とは参加された方からの感想です。実際の支援ツール作成タイムでは、グループごとに子どもの話をしながら、「うちの子はこういうところがあるから、これを作ってみてください」「へー!それ、すごくいいね。コピーさせて」など、ワイワイにぎやかな楽しい時間になっています。

手順書は人から指示されなくても一人でやれるという自立してできるための支援グッズです。仕事の順番を知り、先の見通しがつくと自閉症児は安心します。そして、自閉症の人はいったん仕事を覚えたらきっちり手順通りにできます。自閉症の特性から、言葉だけで言うより手順書の形で視覚的に見せると伝わりやすいことが多いです。

また、スケジュールは子どもたちが自分で気がついて行動できるように、とても大切な支援ツールです。赤磐ぐんぐんではスケジュールカードを持って移動していることで、口頭で注意されなくても、ちょっとした手助けで自分で気がついて行動ができます。ぴっぴに来ているお子さんたちはまだ小さいですが、やはり、見通しは必要です。「予定を伝える、スケジュール」といっても、小さなお子さんに対して文字を使うのはまだ早く、今から使う実物を見せて伝える、スマホの写真を見せる、カードを見せる、メモ帳に絵を描いて伝えるなど、その子の理解に合わせた工夫が必要です。また、お子さんが知りたいと思う分量、理解できる容量も一人一人違い、今していることの次を知れたら十分なお子さんから、次の次まで知りたい子、今日一日の流れを把握しておきたい子、など様々です。

あるお母さんは家庭で自分で工夫し、スケジュールとして、絵を描いて伝えるようにしています。そのお母さんの姿は素敵ですが、スタッフがもっと素敵だと思ったのは、絵を描いてくれているのを待っているお子さんの姿。ワクワクしながらお母さんの手元を見ているお子さんと、お子さ

んのために何かを作っているお母さん。とても幸せな様子でした。自分の大好きなお母さんが作ってくれるものは、お子さんたちにとってうれしいものです。それによって、「よく分からなかった、目に見えなかった『予定』が見える、分かるようになる」なんて、ありがたくて最高です。自閉症のお子さんたちには、「見せて伝えようとする方法」が有効です。



■サポートブック作成勉強会

療育を受けている保護者を対象に「サポートブック勉強会」を開いています。サポートブックの目的は次のとおりです。

- ★初めて関わる方にもお子さんの特性・性格・可愛さや面白さを知ってもらうことができる。
- ★普段の関わりや声のかけ方などを家庭でどう工夫しているかを伝えることで、学校や園でも同じ関わりをしてもらえる。
- ★共通認識を持って、身辺自立やコミュニケーションや集団生活などで、適切な目標が立てられることによって、お子さん自身が安定する。



- ★子どもの特性や支援方法を文章にすることで、保護者自身がより深くお子さんのことを理解でき、整理することもできる。

勉強会では、サポートブックを書くときのポイントや、どのように活用したらいいか、また実際にその場で見本を見ながら書く演習も行います。自閉症の子どもたちは一人一人違っていています。したがって、一人一人に合わせた個別のサポートブックが必要です。また、受け取る側の人にもいろいろな人がいます。誰が見ても分かるように簡潔に書くことも必要です。そんなサポートブックを書くときのポイントだけでなく、サポートブックを使うことをスタートラインにして、園や学校の先生との関係づくりをどのように深めていけばいいかなども学んでいます。いろいろな人の思いの詰まったサポートブック。「こんなふうにほめるんですね」「自分で片付けることができるように片付けるところに写真を貼っているんですね。早速家に帰ってやってみようと思います」

ぐんぐんでは小学校入学にあたって、今療育でできていることが、お家や学校での生活に活かしてほしいと願っています。わが子はどの点が一人でもできていて、どの行動はサポートがあった方がいいのだろう。どうやって一日の見通しを伝えたら、安心して学校生活を楽しめるだろう。療育の待ち時間を過ごす部屋でお母さん同士でサポートブックを見せ合っている姿も見られます。自分以外の方が書いているサポートブックを目にすることもいい刺激になっているようです。そして、今からできる心配事をなくしていくための準備として、お子さんのことを知ってもらうための‘サポートブック’を作ることは必須です。



■ PECS ボード

PECS（絵カード交換式コミュニケーションシステム）とは、絵カードを活用して自発的なコミュニケーションを引き出そうとする方法です。ぐんぐんでは、将来の生活に活かせるよう、PECSボードを持って、実際に街へ買い物に出かけています。

子どもたちの生活の活動を広げるために、公民館・コンビニ・店等、地域に協力を求めることは重要です。お弁当注文・支払い体験では、「お子さんが自分で注文できるように、財布やグッズを工夫してください。また、注文した後に待つ時間があるので、待つグッズをお願いします。」とお願いしたところ、わが子が使いやすいものはどういうものか（文字だけ？写真だけ？大きさは？財布と一体型？など）それぞれのお母さんが自分で考えてくださって持たせてくださいました。





●「ここに来ると私が癒やされて一週間のリセットができるんです。」(ぐんぐんぴっぴ母)



●「子どもの長所を話したり聞いたりすると気分がよくなりました。いつも子どものできないことや困った行動ばかりを話してしまっていたので、いいところをたくさん見つけてあげたいと思いました。」(年中母)



●赤磐ぐんぐん勉強会

「小学校で求められていることがたくさんあって、思っていなかったことがいくつもあったので、今から少しずつできるようにサポートしていきたいです。いい親子関係を築けるように夫婦でしっかり話し合いをしようと思いました。(お父さん、お母さんで言っていることにズレがあるので)」

「サポートブックは今まで勉強会に行ったり、今までも何度も大切だと感じてきましたが、改めて小学校に上がるために準備しようと思いました。親子の関係性等も、大切だとは分かっていましたが、なんで大切か、何につながるのかがとても納得できて、「よし、やってみよう！」と思えました。」

「私が漠然と抱いていた不安や、これってこのやり方で合っているのかな？というギモン。この勉強会で4、5歳に合った、小学生、将来に向けた『指針』を教えていただけました。日常の接し方で子どもにどんなことを伝えていけばいいか、具体的に分かったのでさっそく実行していきたいと思いません。この年齢で『今』だけ見て行動するのではなく、『未来』を考えて行動するアドバイスをもらってとてもよかったです。」



●支援ツール勉強会

「つまずいた時にどのようにするか、聞かせていただいてよかったです。自分だけではなかなか進まない支援ツールも皆さんとできて、いろいろ作ることができました。」(年長母)

「楽しいことが後にまわせるような子になるためにどうしたらいいか」というお話がよかったです。歯磨きの手順書を作られている方が何人かおられて、どれも参考になり、よかったですと思いました。私も作ってみたいと思いました。」(年長母)

「他の人の支援ツールを見て、とても「すごいなー」と思いました。同じ身辺自立の支援ツールでも、いろいろなやり方がありました。自分だけで考えていると、固定概念にとらわれてしまうので、今回たくさんのパターンを見せてもらって、わが子に合う方法を探そうと思いました。」(年少母)



●サポートブック作成勉強会

「サポートブックとは何か、から教えていただき、実際に作ったものを見せていただきながらの説明が分かりやすかったです。どのように活用すればいいのか、どのように作成すればいいのかよく分かりました。説明の時間と作業の時間があり、集中して聞けました。何から手をつけていいのかと思いましたが、いただいたサポートブックのフォーマットは項目が分かれています、取り組みやすかったです。」

「小学校に上がるため、連絡帳の取り方・宿題や運動会での行動などの例がよかったです。なぜ必要か、何のためか、使い方なども分かりやすかったです。肯定的な表現に変えていくのが難しそうですが、自分ではなかなか取り組みなかつたので、良い機会をもらいました！」

「サポートブックにどういうことを書けばいいかが分かりました。できないことについて目がいきがちですが、そういうところをポジティブな表現を使えば、印象が変わるとするのは大事だなと思いました。とても分かりやすかったです。ありがとうございました。」



●ぴっぴ座談会

「☆自分と同じ立場(わが子が診断名がついてる)のお母さんと出会えて、一人じゃないんだと思え、皆さんの笑顔がはげみになりました。」

●ぴっぴ卒業手紙①

「1歳5か月からぴっぴに通って、私が一番得たことは、娘に対する私の愛情が強くなった、ということです。今、あの頃を振り返ると『この子をどう育てればいいのか。』『将来、どうなっていくのか』という不安感の方が愛情より大きかったように思います。

週2回、ぴっぴに通い、娘の表情がどんどん変化していきました。うれしいこと、楽しいことがあれば、「お母さん見て～！！」と私に共感を求めてくれるようになりました。今、辛い、嫌な気持ちを爆発させますが、うれしい・楽しい気持ちも表情豊かに表現してくれます。

超早期療育は子どもにとってももちろん、母親にとっても心が安定するプラスなもの。「どうすればいいんだろう」という不安、悩みをぴっぴの先生はいつも私に寄り添って一緒に考えて、アドバイスをくれました。先生の存在は私にとってとてもありがたかった。私、一人じゃないと。

私の子育ては、ぴっぴから始まったように思います。

ここで3年間過ごし、「この子を育てる」勇気をたくさんもらえました。

ぴっぴの先生皆さんに感謝しています。

色々あるだろうけれど、これからも頑張れそうです。ありがとうございました。」

●ぴっぴ卒業手紙②

「ぐんぐんぴっぴの先生方へ

長い間、お世話になりました。飛行機が気になって 黄色が大好きで 何かあると、頭をゴンゴンぶつけて 立って、おやつやお食事をして トランポリンが怖くて 毎日、夜泣きして。。

そんな息子もこの春5才になります。息子は変わりました。親も変われました。

息子は、過去のことを、あまり忘れないという特性があるので、

楽しかった、ぴっぴのことを、ずっと忘れないと思います。

先生方が息子にくださった愛情と自信に心から感謝しています。

大変お世話になりました。ありがとうございました。」

●あるお父さんのエピソード

お父さんがすごく感動しておられた、ということなのです。最初に見学に来られた時に、ぴっぴでどんなことをしているか、何を大切にしているか、どんなことができるようになるかななどの説明を聞いて、お父さんは、そんなことわが子にできるのかなあと思ったそうです。ところが、療育に通い出して約9か月経った今、ぴっぴで過ごすお子さんを初めて見た時、お子さんはたくさんことができるようになっていたのです。

自分の欲しいものを要求し、おやつの一粒が床に落ちてしまって食べられなくなったので大騒ぎしたけど、最後には納得しておやつのお続きを食べられたり、始まりと終わりの会にちゃんと着席して参加できていたり。

就園していないので、お父さんは家以外でのわが子の様子を見たことがなかったと思いますが、お子さんはイキイキと遊び、すべきことに取り組み、思いを伝えていたのです。

お父さんは着席しているお子さんを見て実は涙をこらえておられたそうです。療育後、靴を履き終えたわが子をぎゅっと抱きしめたそうです。そして、お母さんに言われたことには、お子さんがおやつを落として残念で慌てていた時、ぴっぴのスタッフがその気持ちを理解して、普通の態度で接してくれていたことがうれしかったと言われたそうです。私たちが当たり前に行っているそんな些細なことをうれしいと感じられたお父さん。普段の暮らしの中では外出先等でお子さんが困っている時、周囲の人に気を遣い、神経をすり減らしておられることがうかがえました。世の中の自閉症の理解が進んでいるかどうかは別としても、わが子の行動が目立ってしまう時、親御さんはどうしても気遣いが絶えません。ぴっぴに来ている時は、そんな気遣いから解放されて、安心してほっと一息入れたり、私たちスタッフと一緒にお子さんのかわいい今を愛おしみ、味わっていただきたいと痛感しました。

そして、お父さんはあの日ぴっぴで覚えた毛布ブランコを、おうちでもたくさんしてくれるようになったそうです。小さい今だけしかしてあげられない毛布ブランコ、しっかり親子で楽しんでください。そして、ぜひまた遊びに来てくださいね。きっともっと成長しているはずですよ。

岡山県生涯学習センターでの家庭教育支援における人材育成実践事例

平成29年度 社会教育実践専門講座 『家庭教育支援』

1 はじめに

今年度から開催したこの講座は、社会教育関係職員が取り組むべき問題の解決に向けて、その方策を具体的にイメージし、即実践できるプランを作成することを目標にするものである。参加者は1つのテーマのもとに集まり、県内外の先進的な取組を参考にしながら、演習によって自分の地域に合った活動計画を練り上げていく。

今年度のテーマは「家庭教育支援」とし、その推進に向けて尽力したいという参加者を募集した。「家庭教育支援」を進めていく上でぶつかる大きな壁は、他機関との連携である。「家庭教育支援」の充実は、社会教育行政にとって重要な施策であるが、教育委員会だけでは進めていくのは難しい。しかし、連携しようとする一方にラブコールを送っても、その真意が伝わらない状況では、「業務が増え、大変なのは」と不安になるのも無理はない。「やらされる」でなく、「一緒にやりたい」という双方向の思いになる仕掛けが必要である。

そこで、県生涯学習センターでは、教育委員会と他機関が「家庭教育支援」について連携して取り組むための一歩としてこの講座を提案したい。また、参加者個人のスキルアップはもちろんだが、市町村等で家庭教育支援を進めていく上でのアプローチや研修のあり方などが参考になればと考える。

2 開催要項

○趣 旨 県内市町村の生涯学習・社会教育担当職員や公民館職員、関連する機関・団体の職員、ボランティア、NPO等を対象に、県社会教育行政の当面する諸課題に対応し、事業や講座の企画・立案、人や情報のコーディネート、各種団体等との連携など、専門的な知識・技術に関する研修及び日常の業務に役立つ実践的な研修を行うことで、生涯学習・社会教育による地域社会づくりの推進に必要な資質の向上を図る。

○主 催 岡山県生涯学習センター

○対 象 生涯学習・社会教育担当職員、公民館職員、家庭教育支援チーム員、保健福祉関係者、首長部局関連職員、社会教育施設職員、子育て支援や家庭教育支援に携わっている方等

○会 場 ・岡山県生涯学習センター（岡山市北区伊島町3-1-1）
・ふれあい交流拠点「くるみの森」（備前市伊部1455）【視察見学】

○参加者 ・生涯学習・社会教育担当職員 9名 ・公民館職員 8名
・家庭教育支援関係者 9名 ・子育て支援関係者 10名 ・NPO関係者 3名

○講座内容

【第1回】 9月 1日（金） 10：00～15：30

実践発表 「子育て支援拠点の取組」

NPO法人子ども達の未来を考えるひこうせん 代表理事 赤迫康代氏

演 習 「家庭教育支援と子育て支援」

【第2回】 10月 4日（水） 10：00～15：30

実践発表 「公民館の取組」

安芸郡府中町府中公民館 嘱託職員 川上多佳子氏

出雲市荒木コミュニティセンター チーフマネージャー 原敦代氏

出雲市大社コミュニティセンター マネージャー 玉木明日香氏

演 習 「連携先あれこれ」

【第3回】 11月10日（金） 9：30～15：00

視察見学 「子育てサロン」ふれあい交流拠点「くるみの森」

演 習 「場の工夫あれこれ」

【第4回】 12月21日（木） 10：00～15：30

演 習 「活動計画を立てる」



3 講座のねらい

県生涯学習審議会の提言書「すべての子どものための家庭教育支援の充実に向けて」（平成29年7月）では「乳幼児期から子どもの発達に応じて切れ目なく必要な支援を家庭に届けることが重要であり、行政や地域住民、学校、企業、NPO等の多様な主体が相互に連携しながら進めていく必要があります」と記述されている。

県教育委員会としては、これまで保健福祉部局と連携して「家庭教育支援」を進めるモデルとなる「家庭教育支援チーム」の普及を推進してきたが、県下になかなか広がらないのは、連携の難しさを含めて様々な理由があるようだ。ほかにも、就学前の子どもをもつすべての保護者を対象に「親育ち応援学習プログラム」を活用した体験学習の普及を行っているが、1回のみでの学習に終わっては、生涯学習審議会の提言書にある「家庭教育支援の充実」につながるとは言いがたい。

県生涯学習センターとしては、センターの役割である「人材育成」の視点から「家庭教育支援」の充実に迫るために本講座を開設した。就学前の親子に丁寧に関わることのできる環境（人、空間、時間）においてこそ、「家庭教育支援」の充実が図られるとし、環境を新しく作るのではなく、既存のものを利用することで、できるだけ無理なく進められるのではないかと考えた。既存のもので、親子の身近にあるものと言えば、「子育て支援拠点」や公民館の「子育てサロン」のような場が思い浮かぶ。そのような場で「家庭教育支援」の視点に立った取組が増えれば、親子の学びの「広がり」と「深まり」が期待される。

よって、「家庭教育支援」の視点に立った場づくりを社会全体に広げるために、講座対象を教育委員会関係者に限らず、保健福祉関係者やNPO法人等とし、質の高い「家庭教育支援」を提供できる人材を育成するために、質の高い実践発表・施設見学と演習を中心とした実践型の研修を行うこととした。なお、ここで言う、質の高い「家庭教育支援」とは、子育てに関する知識や技能の習得にとどまらず、親同士の交流を通して見えてくる身近な課題を解決するため、他者と協力しながら主体的に行動できる自立した人間としての成長を支援するものとする。

4 ねらいへのアプローチ

①質の高い「実践」でイメージする

参加者に質の高い「家庭教育支援」をイメージしてもらうために、3つの事例を取り上げた。

1つは「子育て支援拠点」を運営するNPO法人の取組で、「子育て支援拠点」を卒業した親子をNPO法人の活動をもって継続して支援しているものである。ここでは、育児の疑問や悩みなどをその場にいる全員で受け止めながら交流する「親育ち応援学習プログラム」の手法を取り入れた体験学習の場を設けることで、育児の不安や負担感を減らしたり、他者の意見によって考えを深めたり、明日からの元気につながりたりする支援を行っている。実践発表の中にあつた「今必要とされている子育て支援は、みんなの子どもを、みんなで子育てできる場所やしぐみであり、見よう見まねで子育てができ、親が親として成長できる支援である」という言葉は、まさに「家庭教育支援」と通じるものである。「子育て支援」を突き詰めていくと「家庭教育支援」へとつながるのであれば、「家庭教育支援」と「子育て支援」を別物と考えるよりは、「親の育ちにとって必要な支援＝親育ち支援」と捉え、一緒に考える方が分かりやすい。このNPO法人では、子どもの成長に合わせた親への支援だけでなく、支援された親が支援する側に変容していく姿までイメージして取り組んでおり、質の高い「家庭教育支援」として大変参考になった。

残り2つは「公民館」の取組で、乳幼児をもつ親子を対象にした主催講座を開き、親同士のつながりだけでなく、地域のつながりを大切にしながら親の主体的な活動を促している。親の学びたいことを取り入れたり、親自身が計画して活動したりするような場を設け、自立した大人とへつながる工夫が見られる。また、「公民館」の行事の中で役割を担ったり、地域住民と交流したりする機会を作ることで、母親に地域の一員であるという自覚と地域の中で子育てする安心感が生まれている。そのような経験を積んだ親は、他者の子どもや地域のことを考える大人へと変容が期待される。地域に根ざした公民館ならではの「家庭教育支援」モデルとして大変参考になった。

3つの事例は、どれも質の高い実践だが、必ずしも初めからうまくいったわけではなく、試行錯誤の中から練り上げられたものである。実践発表では、その立ち上げから今に至るまでの苦労等を聞くことで、参加者が自身の現状と照らし合わせながら、質の高い「家庭教育支援」への道筋をイメージできるようにした。

②学びを深める「演習」で自分事にする

実践発表から学んだことを、さらに深めるために演習を行った。演習は4名程度のグループに分かれて行い、その日の実践発表から取り上げたキーワードをもとに参加者同士が自らの実践に基づく意見を交流しながら質の高い「家庭教育支援」につながるための工夫を話し合った。所属や経験の違いがある中、それぞれの疑問や思い



を交換することで自身の取組に生かせる新しい発見があった。

各回の演習のテーマは、次の4つである。

第1回：「家庭教育支援」と「子育て支援」を考える

第2回：連携先を考える

第3回：場の工夫を考える

第4回：これからの活動を考える

演習の際のグルーピングやファシリテーションは重要であり、参加者の満足度を大きく左右する。演習のねらいを達成するためには所属や経験の違いなどを十分考慮してグルーピングし、演習では活発な話し合いが展開されるよう、グループの様子に注意し効果的な発問や助言をする必要がある。ただ、学ぶ意欲のない者がグループ内に存在することは避けたい。意欲ある者の学びの妨げになっている状況が見受けられた場合は、ファシリテーターの適切な対処が求められる。

5 演習による深まり

① 「家庭教育支援」と「子育て支援」を考える

その所管するところと言えば、一方は文部科学省、もう一方は厚生労働省であり、それぞれ重要な施策として位置づけられているが、その違いは明確に示されていない。

その特徴を挙げるならば「家庭教育支援」の対象は保護者であり、しっかりとした家庭教育を行えるように親の学びを応援するために社会教育施設のみならず、学校、子育て広場、職場等の多様な場で親子の育ちを応援する学習機会を提供するものとなっている。「子育て支援」の対象は主に乳幼児をもつ保護者で、時には子どもに対する直接的な支援が行われ、「地域子育て支援拠点」は、子育て中の親子が気軽に集い、相互交流や子育ての不安・悩みを相談できる場を提供するために設置されている。

対象はどちらも保護者が含まれるが、「子育て支援」は親の交流の場と子育ての情報提供といった学びの場であるのに対し、「家庭教育支援」は親としての成長や自立までをねらいとする質の高い学びの場が求められると言える。

この講座では、質の高い「家庭教育支援」を広げていくことをねらいとするので、まずは参加者自身の実践を「子育て支援」と「家庭教育支援」の視点で整理した。結果を見ると、参加者全員がどちらの支援にも取り組んでいた。その内容は、保育士、保健師などの専門的な知識をもったスタッフや講師による育児に関する学びや親同士の交流の場が多く、親が人として成長するところまでをねらいにするものは少なかった。質の高い「家庭教育支援」を行うためには、今の実践をさらに工夫する必要があると気づくことができた。

活動の中には、そのねらいによっては「子育て支援」になったり、「家庭教育支援」になったりするものがある。例えば、「クリスマス会」で考えると、「歌や会食、サンタさんからのプレゼントで、会場のみんなで仲良くクリスマスを楽しむ」「おやつづくりやツリーのオーナメントづくりを楽しむ」というねらいであれば、家庭ではそのような経験をするのができない親子にとっての「子育て支援」になる。「親の企画と運営で楽しいクリスマス会を成功させる」というねらいになれば、自分だけでなく他者のことを考えたり、仲間と協力したりという経験が生まれ、「家庭教育支援」になる。この2つのねらいは、同時にその場に存在することもあり、今年初めて参加する親には「子育て支援」、2年目の参加でクリスマス会の運営グループに入っている親には「家庭教育支援」となる。

何をねらうかはとても重要であり、「子育て支援」と「家庭教育支援」の2つの視点を意識するだけで、学びの質が向上するのは間違いがない。2つの視点を意識して、目の前の親にとって今はどちらの支援が必要なのかを問い続けながら、保護者の成長していく姿を思い描き、考えていくことが質の高い「家庭教育支援」へとつながっていく。

「子育て支援」と「家庭教育支援」、それぞれの関係者はこれまで交流が少なく、お互いのことをあまり意識せずにいたのかもしれない。この演習によってそれぞれの特徴を知ること、お互いの重要性と役割を意識しながら、連携したり、橋渡ししたりすることで親子に必要な支援が広がっていく可能性を感じる事ができた。



② 「連携先」を考える

育児に関する知識を学ぶ場には専門的な知識をもつ講師が必要となり、保健福祉部局や医療機関との連携は不可欠であるが、質の高い「家庭教育支援」に迫るために、さらに多様な連携先を考える演習を行った。

まずは、連携先を「人」に焦点をあて、「専門的な知識」「かげで支えてくれる人」「相談相手」というキーワードで考えた。今まで名前も知らなかった職業の専門家、裏方として託児ボランティアをしてくれる地域の方、相談相手としては、同じような活動をする別の団体などがあげられ、参加者の新たな連携先を考えるヒントになった。

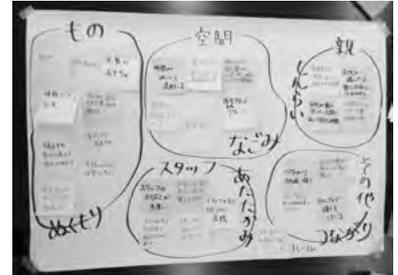


今回は時間の都合上できなかったが、「場所、道具」の面でも連携先が見つければもっと活動の幅が広がるように感じる。いずれにしても、連携先を見つけるためには、常に情報収集を心がけ、新しいつながりは財産であると感じるくらいの開かれた感覚が大切である。

次に、この日の実践発表の中にあつた「地域の中から講師を見いだと、講座で生まれた講師と親子のつながりが、その後も地域の中で生きている」という言葉をもとに、地域の方を講師として講座を企画する演習を行った。「地域の〇〇さんに教えてもらおう」と題して、「子育てに役立つ」「楽しい」「仲間づくり」の3点を目標に親子を対象にした講座を考えた。「鮮魚店」「写真館」「美容院」など地元の商店の方を素敵な講師に迎えることで、新しい講師の発掘と親子と地域のつながりづくりのアイデアが広がった。

③「場の工夫」を考える

NPO法人の活動現場を視察後、質の高い「家庭教育支援」に迫るための場の条件を話し合った。あらかじめ予想していた5つのキーワード（もの、空間、スタッフ、ルール、親）だけでなく、参加者から「地域」「情報」というワードも出て、たくさんの場の工夫が再認識された。演習の最後に、キーワードのそれぞれにフレーズをつけ、「ぬくもり」「つながり」「なごみ」「信頼」「主体性」という言葉で場の条件をまとめることができた。



演習中に興味深く感じたのは、同じ場面を見ている参加者であっても、場の工夫のとらえ方は様々であることだった。同じ子どもが泣いている場面を見ても「親が安心してスタッフに子どもを預けられる環境があり、良かった」「わが子を放って学習に参加するのはどうなのか」というように、異なる意見が出ていた。ここで大切なのは、一般的な目線で考えるのではなく、目の前の親子にとって今必要な支援は何かという意識で考えることである。「この場に、この人に」と考えて、「このねらいを優先するので、この方法を選びましょう」というように、しっかりとした協議の上で答えが選択されることである。視察した現場のスタッフの皆さんも、一日の終わりにスタッフミーティングを開き、情報共有や感覚のすりあわせを行い、丁寧な場づくりを大切にされていた。

④これからの活動を考える

最終日の「これからの活動を考えよう」では、自身が実践の中で気になる保護者の姿から取り組むべき課題を設定し、長期の計画と短期（ある一日）の活動内容を考えることで、これまで学んできた、質の高い「家庭教育支援」につながる活動を具体的な形にしていった。グループ内でのアドバイスがさらに深い学びへと導いた。

現状を理想に近づけるためにすべきことが、課題であり、学びの場づくりと言える。いつまでにどの程度達成するかという目標を設けながら、これまで学んできた連携先や場の工夫を取り入れて、質の高い「家庭教育支援」になるように活動計画を作成した。

「焦点が定まった」「やりたいことがはっきりした」などの感想からもうかがえるように、参加者全員が明日からの実践に向けて計画を立てることができ、満足度の高いものとなった。



また、自分とは異なる所属の参加者との演習に関しては「今までの自分にはなかった視点や発想に触れ、学びが深まると同時に自分を応援してくれる仲間ができ、活動への意欲が高まった」という感想や、市町村教育委員会の家庭教育支援担当者の発表を聞いて「行政も頑張ってくれていることが分かったので、心強く感じた。」という感想が見られ、これまであまり見えていなかった他団体ともに研修を重ねることで連携の意識が芽生えたと言える。

6 終わりに

「今の親子を見ていて、気になる点はどこか」という問いは、所属にとらわれずに思いを語ることができ、さらに「気になるから放っておけない。何とかしたい。」という感情と共に語られる支援や場のアイデアは、参加者同士の共感を生み、「一緒ががんばっていこう」という仲間意識を生み出すことができた。異なる団体や所属の集まりであるからこそ、新しい発見や新しいつながりが生まれ、それまでの活動の限界が広がり、新たなしかけや工夫が見えてくる。

この講座を終えて、教育委員会と保健福祉部局とNPO法人等がお互いの活動や情報を共有し、共に考え話し合う場（研修会等）をもつことは、それぞれの取組の質を高めることにつながり、それぞれの長所を生かして役割分担しながら、その地域に暮らす親子に質の高い「親育ち支援」を提供することができると感じた。

ここで学んだ参加者の明日への一歩が、家庭教育支援の充実につながると信じている。

学びの「広がり」と「深まり」による質の向上を目指す

家庭教育支援でも子育て支援でも学びは重要である。まずは学びが位置付いていることが大切であるが、次のステップとして、学びの中身、学びの質の向上が求められる。

その際、学びの質の視点として、「広がり」と「深まり」が大切である。

「広がり」は対象の幅が多様になることである。

- 父親の参加
- 出産前の夫婦の参加
- 祖父母の参加

「深まり」は学びの中身が深まることである。それは次のような内容である。

- 主催者が意図的に設定した親の学びがある。
- 保護者の様々なニーズに応える内容になっている。
- 親同士の学びがある。
- 継続的な講座を設定している。
- 自分の生活を振り返りつつ学べる。
- 体験する場面を設定している。
- 他の事業との関連を意識して設定している。
- 学んだ者が今度は支援者になる。学びの循環が起こる。
- 参加者自身が学ぶ内容を主催者といっしょに決める。
- 自分や家族の生き方も変容する。
- 実践の中で新たな課題が生まれ、その解決を主体的に図っていくというような新たな展開が生まれる。

大切なことは参加者の細かなニーズに対応し、参加者の気持ちに届く、多様な学びの場を設定することである。よりよい子育てを積極的に行いたい、日頃気になっている悩みや不安に思っていることなどが少しでも解消し、気が楽になって子育てに役立つものであることが大切である。

主催者として、社会の要請や地域、参加者の様子から必要と思われることを設定する。参加者のニーズを重視し、意図・背景を考慮して学びを設定する。

様々な機関や個人と連携することで内容を充実させることができる。連携するにあたっては、主催者だけがすべてを抱え込むのではなく、連携先の得意な分野を生かした推進を行う必要がある。不必要な負担をつくらず、主催者と連携先のそれぞれの得意を生かすことで有効に働く。

切れ目のない支援を描く

学びの「深まり」の事例で取り上げた岡山市立上道公民館では、「子育て寺子屋」は、おかやま子ども応援事業を実施する中で小学校・中学校だけでなく、就学前からの子ども（親子）を対象にした取組の必要性、切れ目のない支援の必要性を感じ、実践している。立ち上げた際の意図としては、おかやま子ども応援事業の大きな枠組みの中で、家庭教育支援の中の発達段階に応じてステップアップしていく中で就学前の取組が大事と認識し、乳幼児の取組からスタートした。就学前が特に大事という認識があり、親育ち応援学習プログラム（親プロ）のリーダー養成もやっているが、それとは別に就学前の家庭教育支援として位置付けたのである。

就学前の家庭教育支援を単独で行うというよりは、切れ目のない支援として、おかやま子ども応援事業との関わりの中で就学前の家庭教育支援の充実を考慮に入れて、家庭教育支援、放課後・土曜日支援、学校支援と関連させて行っていくことが望まれる。

また、ぜひとも中学校区内の活動として視野に入れたい。つまり、中学校区の小学校、中学校との関連として就学前の子どもについても合わせて取り組むことができればよいと考える。岡山県では、中学校区を統括する地域コーディネーター＝中核コーディネーターの養成を行ってきているが、中核コーディネーターにはぜひ、この視点を持っていただきたいと考える。

中学校区を切れ目のない支援、つまり、おかやま子ども応援の部分が拡大することによって、子どもや保護者を取り巻く豊かな環境づくりの推進につなげていきたい。



まとめ

本調査研究のテーマは、親、つまり大人の学びである。それに関連して、成人教育学者のクラントン (Cranton, P.) は、「形を作っていく (forming)」ことを重視する子どもの学びとは違い、「形を変えていく＝変容していく (transforming)」ことに重点をおくのが大人の学びであると指摘している¹⁾。彼女の示唆にしたがうと、“変わる”のが大人の学びの要諦といえる。

とすれば、大人の学びである親の学びを支援するには、学習機会の量的な拡大を図るだけではなく、学びの質にこそ着目し、彼・彼女らが“変わる”ことに対する支援のあり方を考えていくべきだろう。たしかに、家庭教育支援や子育て支援など、親の学びに関する学習機会は充実してきている。しかし、学びの質、とりわけ“変わる”に重点をおいた学びの機会は必ずしも十分とはいえない。そこで、学びの質についての研究視点として、「広がり」と「深まり」に焦点をあてた本調査研究が企画・実施された。

まず、「深まり」については、「岡山市立上道公民館」と「NPO 法人岡山県自閉症を育てる会」の事例がとりあげられた。どちらも学びを「深めた」好事例であるが、“変わる”という点では、上道公民館の実践での「リフレーミング」が注目に値する。リフレーミングとは、「ものの見方を変えること、今までとは違う視点から見ること」と位置づけられている。これは、これまで培ってきた経験を問い直していく学びであり、まさに成人学習論でいうところの「意識変容の学習」である。大人は経験があるからこそ、かえって固定的な思考のパターンや独りよがりな学習に陥り、新たなことに心を開かない場合がある。だからこそ、自分自身の認識枠組みや視点の適切性をふりかえり、意識の変容を促すような、「深まり」のある学習機会が求められる。このようにみると、親の学びにおいても、新しい知識や技術を次々と「Learn (ラーン：学ぶ)」するだけでなく、これまでの学びの一部を「Un-Learn (アンラーン：いったん捨てる)」したり、「Re-Learn (リラーン：学びなおす)」することも大切になってくる。とくに、大人の学びとしての「Un-Learn」は重要になるため、リフレーミングの手法は効果を発揮すると考えられる。

さらに、長年培ってきた経験にもとづく彼・彼女らの前提は、意識の奥底にしみ込んでおり、変容どころか、自分からはその存在に気づくことも難しいだろう。したがって、この見過ごされやすい隠れた前提、さらにはその歪みに気づき、ふりかえっていくためには、他者による支援が欠かせない。だからこそ、「NPO 法人岡山県自閉症を育てる会」のスタッフは、自身の研修に力を入れ、支援方法を学んでいるのだろう。そして、研修で学び培われた多様な支援ツールが、親の変容を促し、学びを「深める」ものになっている。

ここまで、学びの「深まり」についてみてきたが、「広がり」の視点も見落とせない。というのも、住岡英毅による「学習課題によっては、学んで欲しい人が学ばず、すでに十分学びつくした人がさらに多く学びつつある²⁾」という興味深い指摘があるからだ。彼の指摘は、家庭教育支援や子育て支援にかかわる学習課題を扱う講座にもあてはまる問題であろう。このようにみると、学び、とくに学習者の「広がり」も考慮に入れなければ、一部の学習者だけが学びを「深めて」いくことになってしまう。その意味で、「岡山市立御南西公民館」と「ライフパーク倉敷 市民学習センター」の事例は示唆的である。両事例では、父親、出産前の夫婦、高校生といった学習者の「広がり」がふまえられていた。もう少し言うと、「岡山市立御南西公民館」では、「お父さんの子育て応援通信『いいぱぱ』」を発行し、父親同士だけでなく、母親等への情報提供も図り、共有化を促す工夫もおこなっている。また、「ライフパーク倉敷 市民学習センター」では、倉敷市保健所との連携のもと講座が催されている点が特筆される。教育委員会だけでなく、首長部局との行政連携による講座の企画・実施は、学習者の裾野を「広げる」意味でも、有効であろう。

最後に、「循環」の視点を指摘しておきたい。親の学びの質を高める「広がり」と「深まり」に注目した事例分析の中で、「学んだ人が今度は支援者になる」という「循環」の視点の重要性が浮かび上がった。学びの「広がり」と「深まり」を促すには、親たちを学びの受け手としてだけでなく、学びによって、意識の変容を促し、支援者にも“変わる”ことができる主体的な存在として捉える必要がある。実際、事例では、学ぶ内容を参加者が決めたり、就学前に限らず思春期の講座をつくったり、高校生の参加を試みたりと、学びを継続させ、「循環」を促す様々な工夫や仕掛けが取り入れられていた。とくに、「岡山市立上道公民館」の「子育て寺子屋」では、単なる就学前の家庭教育支援の講座としてではなく、「おかやま子ども応援事業」という、学びや支援の「循環」を伴う大きな枠組みの中で、小学校・中学校へと「タテ」の発展³⁾も視野に入れた取り組みとして考えられていた。このようにみると、親である大人の学びの支援を質的に高めていくには、講座担当者の問題意識やねらいこそが鍵を握っているといえよう。

(岡山大学大学院教育学研究科 熊谷 慎之輔教授)

注)

- 1) P. クラントン (入江直子、豊田千代子、三輪建二訳) 『おとなの学びを拓くー自己決定と意識変容をめざして』 鳳書房、1999年、p.203。
- 2) 讃岐幸治・住岡英毅編『生涯学習社会』 ミネルヴァ書房、2001年、pp.12-13。
- 3) 「タテ」への発展という点では、「中学校区」に着目し、中学校区での支援のあり方を考えていく必要がある。その意味でも、岡山県が推進する、中学校区を統括する地域コーディネーター＝中核コーディネーターが果たす役割が重要になってくる。



発行 岡山県生涯学習センター

〒700-0016 岡山市北区伊島町三丁目1番1号

TEL:086-251-9751 (振興課)

<http://www.pal.pref.okayama.jp/>

<https://www.facebook.com/okasyogaise>